

第9章 研究倫理：研究者として

「やってはいけないこと」 125

- 1節 モラルとしての研究倫理 125
- 2節 研究者が陥るかもしれない「地獄」 127
- 3節 仮説の後づけ (HARKing) 128
- 4節 p 値ハッキング (p-hacking) 129
- 5節 蔓延する QRP's 132

第10章 研究倫理：モラル違反を抑止するシステム 135

- 1節 研究結果の再現可能性 136
- 2節 心理学界で起こった問題 137
- 3節 システムの整備 142 1 材料や手続き・データの公開制度 / 2 事前登録制度 (pre-registration system)
- 4節 心理学研究の「パラダイムシフト」 147

第11章 研究成果の公表：心理学論文の書き方 149

- 1節 論文のアウトライン 150 1 表題 / 2 問題と目的 (序論) / 3 方法 / 4 結果 / 5 考察 / 6 引用文献 / 7 要約 / 8 付録
- 2節 論文の文章表現 156 1 正確に伝えるために注意すべき点 / 2 パラグラフ・ライティング
- 3節 図表 160
- 4節 全体的なチェック 162
- [付録] 心理科学実験実習 レポート作成 チェックリスト 163

終章 よりよい心理学研究のために 171

- 1節 「研究」ということ 171
- 2節 よい研究とは何か 172 1 確実性があること / 2 意外性があること / 3 学術的価値 / 4 社会的価値 / 5 学術的価値と社会的価値の両立
- 3節 心理学研究への船出 176

引用文献 177
索引 181

三浦麻子 「なるほど!心理学研究法」
北大路書房

心理学とは何か

心理学を「研究」する世界によろこそ。

本書は「心理学」の研究法、つまり心理学という学問に自ら取り組むための技能 (スキル) や技術 (テクニック) を学ぶための本である。技能とは適切な知識をはたらかせることができる能力のことであり、技術とは適切な道具 (ツール) を使って技能を発揮するための方法のことである。この2つがそろってはじめて、研究という知的活動が存分にできるようになる。それぞれ片方だけではうまく機能しないし、両者が組み合わせることでお互いを磨くことも可能になる。本書とこのシリーズの他の書籍を通じて身につく技能や技術を活かすためには、そもそも何をするためにその技能や技術を学ぶのかを理解しておく必要がある。

何をするのか? ——心理学である。

こうした技能や技術を獲得しようとする皆さんにとってまず必要なのは、心理学とは何をする学問なのか、つまり心理学という学問そのものに関する知識を改めて確認しておくことである。おそらく現時点の皆さんは、心理学という学問をまったく知らないわけではなく、すでにある程度は学んできているものと思われる。

本章は、細部にはわたらぬまでもそのあらましを再確認するのが目的だが、その際に「研究者」としてかわることを明確に意識していただきたい。心理学を「研究する」というのは、受動的に知識（情報）を受け取るだけではなく、自ら積極的に知識（情報）を産み出す側になるという意味である。あるいは、知識を現場に活用するのではなく（もちろんそれも重要な心理学の営みの一つだが）、活用するための知識を提供する側に立つということである。その自覚をもって、自分が実践する学問を改めて点検すると、今までになかった気づきを得られるかもしれない。

ということで、やや大段に振りかぶってしまった感があるが、序章は「心理学とは何か」と題することにした。「心理学って面白そう！」「心理学を学ぼう！」という最初のステップはすでに上った皆さんが、「心理学を研究するってどういうことなの？」と思って本書を開いた今、そもそも心理学とはどういう学問なのかをふり返り、そしてそれを研究することの難しさと面白さを予感してくださればと思う。

1 節 心理学の定義

心理学は定義がよくわからない学問だと言われることがたびたびある。確かに、巷に「心理学」という言葉はあふれている。新聞記事やテレビ番組でそれらしき言説を見かけることはよくあるし、心理学を冠する一般向けの書籍も無数に刊行されている。しかしそれらの間にいまひとつ共通点が見いだしにくい。がために、よくわからないというイメージを与えやすい。その原因は、心理学の対象が心という最も人間の身近なもの、あるいは人間そのものだとということにある。親しみやすい対象であるだけに、「みんなが関心をもつものに学問っぽくアプローチしてみる」という雰囲気醸し出すためだけに「心理学」という言葉が濫用されているケースが残念ながら少なくない。つまり、「心理学とは何か」を知ろうとして、いくら巷の「心理学」本を漁っても、「やってはいけない」事例の収集先としては有用かもしれないが、「研究者」として心理学にかかわるのに役に立つ情報は得られにくい。そればかりか、どんどん最初の

表 0-1 主要な国語辞典による「心理学」の定義（下線は著者による）

広辞苑第六版（岩波書店）：生物体の心の働き、もしくは行動を研究する学問。精神または精神現象についての学問として始まり、19世紀以後、物理学・生理学等の成果を基礎として実験的方法を取り入れ、実証的科学として確立した。

大辞林第三版（三省堂）：経験的事実としての意識現象と行動を研究する学問。精神についての学問として形而上学的な側面をもっていたが、19世紀以降実験的方法を取り入れ、実証的科学となった。

デジタル大辞泉（小学館）：生物体の意識や行動を研究する学問。古くは形而上学の中に含まれ、精神や精神現象を問う学問であったが、19世紀以降実験的方法をとり入れて実証科学として確立。一般心理学・動物心理学・発達心理学・社会心理学・臨床心理学など、多数の分野がある。

趣旨からずれることになってしまうかもしれない。そんな無駄かもしれない努力をするよりもまず、学問としての心理学の定義を確かめよう。

表 0-1 に、主要な国語辞典による「心理学」の定義を示す。すべての定義に共通しているのは、19世紀以降のすなわち現代の心理学は、研究対象が「心のはたらき（意識）や行動」であることと、「実証（的）科学」であることである。後者が意味しているのは、心理学の研究目的は、それらの中から経験的事実に基づくデータを収集し、その積み重ねによって現象を正確に記述し、秩序（その現象が存在するための条件）や法則（その現象が発生するメカニズムや存在すると決まって生じる事柄）を発見して、現象の理解（なぜその現象が存在するのかについて知識を獲得する）、予測（ある現象が生じる前に、それを予期できるようにする）、制御（ある現象を引き起こすべく、それに先行する条件を操作する）を行なうことだということである。

2 節 心理学を研究することの難しさ

心理学は実証に基づく科学であり、そうであるがゆえに、あらゆる研究成果は、そこで行なわれた実証によって対象とした現象を正確にとらえることができているかどうか、見いだされたのが事実だといえるかどうかを、常に厳しく問われることになる。マスメディアをとおして流れる言説や一般向けの書籍の

内容がすべて間違いだと決めつけることはできないが、直観的で理解しやすいこと、もっともらしくて面白いことが優先されがちなことは否めず、事実かどうか真剣に問われることはほとんどない。土台としての実証の内容が質されることがない研究は、見た目は「学問」を装っていたとしても「娯楽」だと言われても仕方がない。つまり、科学研究の際に最も重要なのは、「研究で得られた事実がどのようにしてそれと認められたのか」という実証のロジックがきちんと組み立てられていることである。

では、科学の中でも心理学を研究しようとするわれわれが、実証のロジック構築に際して留意すべき点は何だろうか。ここでもう一度辞書の定義に戻ってみると、心理学における実証のロジックの中で特に注目すべき点が見えてくる。それぞれの辞書が定義する心理学の「研究対象」を見ると、「行動」は共通している一方で、その前に置かれているのは「心のはたらき」「意識現象」「意識」とばらついている。前者は外部から観察可能な、ある程度誰の目にも明確なもの、後者は外部から観察することができない、誰もが「おそらくそこにあるだろう」と考えてはいるが明確ではないものである。そもそも「心」というものそれ自体、実際にあるかどうかという議論の対象になりえない。なぜなら、あると考えて、その前提で話を進めているだけだからである。明確でないがゆえに表現もいまひとつ定まりがない。そして、両者は並列ではない。心理学は、両者を対象にしているが、データを収集するという意味で直接的に対象にしているのは行動であり、それを間接的な「心のはたらき」「意識現象」「意識」の現われだと思見している。ということは、間接的に何を見いだしたいがために、どのような行動を対象にデータを測定しているか、という対応関係が適切であるかどうか、心理学における実証のロジックで最も重要だということになる。

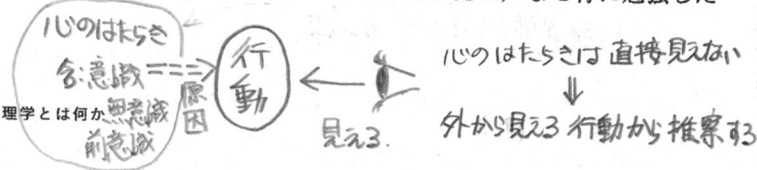
さらに、前出3つのうち「意識現象」と「意識」は、確かに心理学の関心対象ではあるが、これら2つの範囲は「心のはたらき」よりも狭く、その意味で、心理学が行動をとおして見いだしたいのは「意識現象」や「意識」だけではない。なぜなら、人は行動の背後にある「心のはたらき」を意識できる場合もあるが、たとえ自らのものであってもそのすべてを意識できるわけではないからである。もっと強い言い方をすれば、人間が展開している日常的な活動のうち、意識的になされているものはごくわずかである。たとえば、なぜ特に勉強した

わけでもないのにだいたい正しい文法で言葉（母国語）を話すことができるのかという、自分が「話せる」しくみを意識できる人はいないだろう。また、ものの見え方についても同様で、なぜわれわれが立体的にものを認識することができるのか、あるいはいわゆる「錯視図形」をなぜ物理的にあるがままの形や色で知覚することができないのか、といった視覚のしくみを意識できる人もいないだろう。意識している（できる）ものとしては感情や欲求などがあるが、これもその内容を意識することはできても、なぜそれが生じるのかを意識して感情や欲求を抱くことはほとんどないし、考えてわかるものでもない場合が多い。しかし、こうした「無意識」の行動の背後にメカニズムが何もないわけではない。つまり、心のはたらきを知ろうとすると、それを意識できるものだけに限ってしまうと、わかることはごく限られたことになってしまう。心理学では、それが本人の意識にのぼるものであるかどうかによらず、心のはたらきについて推論するために行動に手がかりを求める。

心理学を研究することの難しさは、おそらくここにある。心のはたらきがどのようなものかを意識することは困難なのに、行動とそれが表象している心のはたらきの対応関係が適切かどうかを問われるのだ。たとえば「洗面台の水道の蛇口をひねれば水が出る」という事実は、貯水槽から配水管を経由して家庭に水が引き込まれているという給水装置によって実現されているもので、われわれはこの給水装置のメカニズムを観察することができる。もちろんそこには複雑なしくみがあって一概に理解することは困難かもしれないが、明確でないところはない。行動と心のはたらきの関係は、それとはむしろ逆で、一見理解できそうでいて、明確だという証拠を見いだすのが難しい。それにあえてチャレンジするのが心理学を研究するという行為である。

3 節 心理学を研究することの面白さ

これから心理学の研究法を学ぼうとする人に、その難しさを伝えてある程度の覚悟をもっていただく必要はあるが、難しさとともに面白さがあることも伝えなければ不公平だろう。直接的な研究対象である行動について、実にいろいろ



るな角度から注目することができ、その背後にあるどのような心のはたらきを取り出すかも多様であるところが心理学の面白さである。それは、行動がただ一つの要素によって決定されるものではなく、いくつもの要素が組み合わさった複雑な相互作用の所産であることによるものである。相互作用のすべてをいっぺんに解明しようと考えたとてつもなく難しいが、どの要素に光を当てるかによって、さまざまな方向性をもつ研究が展開できる。これが、心理学を研究することの面白さである。

どのような視点で行動を眺め、そこからどのような手がかりを得るかという違いによって、心理学は緩やかにいくつかの領域に分かれる。たとえば「初対面の人に出会ったときの人間の行動」について考えてみると、「どの程度の距離を取るか。どのような声のトーンで、どのような話から切り出すか。そこに旧知の人に出会ったときとはどのような違いがあるか」に注目することもできるし（社会心理学）、「発汗や心臓の鼓動などに、どのような生理的変化が生じるか。それによって不安や緊張、ストレスの程度を記述することができるか」といったことに注目することもできるし（生理心理学）、「初対面だというだけで極度に不安になってしまう人がいるが、それにはどのように対処すればよいのか」に注目することもできる（臨床心理学）。このように、注目する角度が多様であれば、それに関するデータを収集する方法、つまり研究技法にも多様さが生まれる。行動を眺める多様な視点があり、それぞれにとって適切な技法（本書およびシリーズをなす各巻で紹介するのは、実験、調査、観察、面接）が駆使されることによって、「初対面の人に出会ったときの人間の行動」一つをとっても、心のはたらきに関するバラエティに富んだ知見を提供することが可能になる。

心のはたらきが一概には理解できないものなのであれば、個々の研究が徹底的にいろんな角度からスポットライトを当てることによって、集大成としてその姿を浮かび上がらせようとする持続的な努力が必要になるし、言い方を変えればそれこそが



心理学研究にふさわしいスタンスである。巨大なジグソーパズルを1ピースずつ埋めていく作業にたとえてもよいかもしれない。現時点でそれが完全にできているわけではないし、将来完成できるかどうかともわからない。もしあなたが、それを目指して進むことに面白みを感じることができるならば、おそらく心理学を研究することに向いているだろう。

第1章

心理学の研究とは何か

本章では、心理学を念頭に置きながら、研究とは何かということを一般的に考えてみたい。私たちは日常的な経験から人間の「こころ」について、いろいろな知識をもっているが、それらは不十分であったり、偏っていたりすることもある。心理学の研究とは、心理現象についての日常的な認識を越えようとする営みである。いわゆる「良い研究」とは、人間の心理について多くの情報を与えるものであり、さらに、生活における実用的な価値をもったものといえる。こうした心理学の研究をする過程と、それを遂行するために必要な学習についても考えてみよう。

1.1 「こころ」についての知識

1.1.1 日常的経験からの認識

私たちは、日常生活の中での自分の経験から、人間の「こころ (mind)」の性質についてさまざまな知識をもっている。その多くは、自分自身の意識の内省や、他者の行動の観察から得られるものである。しかし、そのことはまた、こころについての私たちの認識が狭く、偏ったものとなっている可能性を示しているともいえる。

たとえば、言葉を使うということは、こころのすぐれたはたらきのひとつである。ところが、「人間はどのようにして言葉を習得するのか」、「幼児期に言葉を習わないとどうなるのか」、「言葉を使うということは、どのようなしくみで行われているのか」、「言葉を使う能力は、他の能力とどのような関係があるのか」、「他の動物でも言葉を使えるようになるのか」というような質問には、

いわゆる常識からだけではとても答えられない。自らが言葉を習ってきて、しかも現在使いこなしているにもかかわらず、その過程、機能、しくみなどについては、私たちはなかなかわからないのである。同様のことは、知覚、記憶、感情、欲求、性格、……といった心理的な現象すべてについてあてはまる。

私たちは、ここらについて、わかっているつもりでもあまりわかっていないのではないだろうか。この「わかっていない」ということを、いくつかのレベルに分けてみよう。まず、まったく知らないという「無知」のレベルがある。たとえば、異常心理、犯罪心理、能力・性格の個人差や相互関係などについては、知識や経験を十分持ち合わせていないので、なかなかわからない。

次に、自分では意識せずに行っている無意識や前意識のレベルがある。「無意識 (unconsciousness)」とは、指摘されてもそのしくみが意識化できないもので、知覚や言語の処理などはこれにあたる。一方、より高次の学習、思考、判断などは、通常はあまり意識されていなくても、指摘されて内省すればどのようにやっているかが自覚化できるものもある。このときは「前意識 (preconsciousness)」の状態にあったと言われる。

さらに次のレベルとしては、「知っている」、「わかっている」と思っている

コラム 1-1 「日本人＝集団主義、アメリカ人＝個人主義」は本当か

私たちは一般に、日本人が意見や行動を他者に同調させることが多く、アメリカ人は独立性を重んじ個人的に行動すると信じている。また、そのようなとらえ方にもとづいた文化論が多くの書物となって公刊されている。ところが、高野・纒坂 (1997) は、これまでの実証的な研究はそのような事実があることを示しておらず、これは一種の俗説、もしくは一時的な状況的要因から生まれた現象の過度の一般化であると主張した。それに対して、文化心理学の中では、自己を他者から独立した存在としてとらえる欧米的な文化と、他者との関わりにおいてとらえる東洋的な文化があるとする Markus & Kitayama (1991) の理論が影響力をもっており、両者は激しく衝突することとなった。この論争は、高野・北山両氏の「集団主義論争」として、日本認知科学会発行の『認知科学 Vol. 5, No. 1』(1999) で展開されている。

も、誤解やバイアスがあって、「本当はわかっていない」というものがある。「アメリカ人は、〇〇な性格の人が多い」というような心理的「法則」を私たちはつい少数の経験からつくりあげてしまう。これは、それ自体が偏見やステレオタイプの研究として、そのメカニズムが研究されているほどであり、人間の誤認識の典型的な例といえる。

1.1.2 勉強と研究の違い

「何かを知りたい、わかりたい」と思うのは、知識体系をより豊かにしたいという自己実現的な行為である。同時に、自分がより適応的な生活を営むために役立つものでもある。前述したように、私たちの日常的な認識は、経験や能力の制約から不十分であったり、偏っていたりする。ここらのしくみやほたらきについて、より多くのことを知りたいと思ったときに、どうすればよいだろうか。それは、結局のところ「調べてみないとわからない」ということになる。

「調べてみる」ということに関連して、勉強と研究の違いについて触れておこう。勉強とは、すでに蓄積されている情報を検索し自らの知識とすることで、いわば「知識の吸収」である。一方、研究というのは、自ら追究して何らかの結論を得ることであり、「知識の生産」と言えるだろう。これらは、図 1.1 のように相補い合うものである。むしろ、望ましいのは、それらのバランスがとれて、相乗的な効果をもたらしているような知識の拡大のあり方といえる。

研究的な要素を含まない「勉強」の典型は、いわゆる「知識つめ込み型」の勉強とよばれるものである。新しいことを知るといふ知的な充足感はあるかもしれないが、自分で新たに考えた内容がない。しばしば学生のレポートで見かけるものに、「文献丸写し型」のレポートがある。誰がどのような理論を立てたとか、どのような事実がわかっているとかいう説明が、他者の本や論文から抜粋されてつなげられている。もしそれらを自らの枠組みで関連させて論じたり、批判的に検討して自分なりの主張や見解を打ち出すならば、「文献研究」にまで高めることができるのである。すぐれた「評論 (レビュー論文)」とは、こうして他者の研究を基にしながらも、新たな知識を生産しているものである。

一方、既存の知識の吸収を含まない「研究」は、ひとりよがりなものになってしまう。たとえ、努力してデータを集めて分析したり、自分なりの理論を構

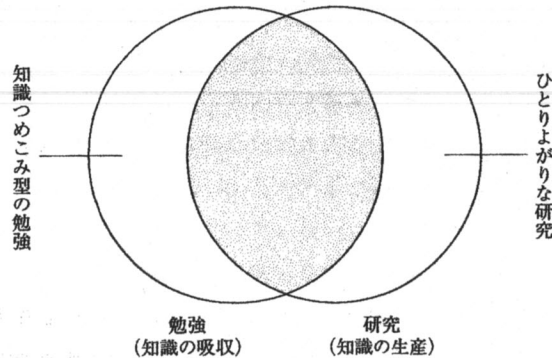


図 1.1 「勉強」と「研究」の違いと相補性

築したりしても、それはすでに知られていることであったり、方法論的におかしなものであったりすれば、研究としての意味はほとんどなくなってしまう。学生のレポートや論文にも、ときおり「このような調査をして、このような結果になった」ということがただ記述してあるだけのものがある。たしかに、努力や考察のあとは認められても、これまでの研究の成果を踏まえてそれとの関連について言及しなくては、すぐれた研究とは言えないのである。

1.2 良い研究とは何か

1.2.1 研究の情動的価値

ここで、あらためて、「良い研究」とはどういうものかを考えてみよう。ただし、はじめに断っておかなくてはならないことは、どういう研究が良い研究かについての評価は、評価者によってきわめてまちまちであり、けっして客観的な基準などないということである。それでも、良い研究とはどのようなものかを論じることには意味があるのは、「研究する」ということをあらためて多角的にとらえ直し、自らの研究の方向を定めるときに指針になるからである。

研究の最大の目的は、対象について何か新しいことが「わかる」ということにある。ここには、新たな事実（あるいは個々の事実から見出される「法則」）を発見することと、いくつかの事実を統合的に説明する理論をつくることとが含まれる。一般に、知らなかったことがわかることを、「情報」を得たという。

1940年代に Shannon (1948) によって創始された「情報理論」では、情報とは「不確定度」が減少することととらえている。たとえば、投げたコインが表か裏かということをお教えられれば、2つの同様に不確かな選択肢が1つに確定したことになる。振ったサイコロの目であれば、1の目になっている確率ははじめ $1/6$ だったものが、「奇数が出ている」とお教えられれば $1/3$ に変化し、これも情報を得たことになる。

ここで、情報理論の基本的な考え方を参考にとすると、意外性と確実性が情報 ^{新奇性} ^{信頼性} の大きさを規定していることになる。「意外性」というのは、「(a) A さんが宝クジで1万円あたった」という情報と、「(b) A さんが宝クジで5000万円あたった」という情報の違いに相当する。つまり、もともと生じる確率が小さい事象が起こったという (b) のほうが、より大きな情報を得たことになる。「確実性」というのは、「(c) 『5000万円あたった』と A さん本人から聞いた」という場合と「(d) 『A さんが5000万円あたった』と友人の友人の友人から聞いた」という場合の違いにあたる。(d) のように人づてになってしまうと、それだけ信憑性が低くなり、不確定度が残るために、情報としては価値の低いものになる。

研究の情動的価値も、これに準じて考えることができる。意外な事実や法則の発見、意外な説明のしかたなどを提示するほうが研究としての価値は高い。しかも、それをより確かなものとして提示するほうが価値が高いことになる。意外性のほうは、研究で示そうとしていることがどれくらいオリジナリティがあるかに関わり、確実性のほうは、しっかりとした論理や実証にのっとっているかどうかに関わる問題といえるだろう。くりかえすことになるが、情動的に見て価値のある良い研究とは、一見意外と思われることを、確実な方法で明らかにしている研究のことといえる。実際には、両者を同時に満たすことは難しく、うすうすわかっていることを実証的に追認することや、確実とはいえないがユニークな理論を仮説的に提案することも意義がある。しかし、研究の方向性としては、意外性と確実性の両方を高めることが期待されているのである。

1.2.2 研究の実用的価値

研究というのは、新しいことを知りたい、わかりたいという欲求に支えられ

ている。しかし、どんなことでも新しいことがわかればそれだけで価値がある研究といえるかという点、必ずしもそうではない。それがわかることによって何の役に立つかが問われることも多い。研究で得られた知見や理論を応用することによって、私たちの生活に益をもたらすならば、その研究はそれだけ意義がある。これは研究の実用的価値と見なせる。←有用性と言ったこともある。

実用性が高い研究というのは、いわゆる「応用研究」とは限らない。非常に基礎的な研究であっても、その原理がさまざまな場面で使われることによって、広い実用的価値が生まれる場合もある。数学や物理学などでは、そうした事例が数多くある。心理学においてはけっして多いとは言えないが、とくに教育、臨床、道具や環境の設計などの領域では、実用に結びつく基礎的な研究が求められている。

一方、実用性とは逆に、研究が社会に対して何か悪影響を及ぼすことがあるという点にも注意しておかななくてはならない。心理学の研究は、得られた結果が社会的差別を助長することになったり、研究の遂行過程で倫理的な問題を引き起こしたりすることがときおりある（コラム1-2、付録2参照）。研究とは個人的な知的関心にもとづいて自由に行うものであるにしても、社会の中で行

コラム1-2 ソシオメトリーの利用と問題点

集団内の人間関係を把握するのに、Moreno (1953) の考案した「ソシオメトリー」という手法がしばしば用いられる（田中、1981）。たとえば、学級集団内で、隣の席に座りたい人（座りたくない人）とか、同じ班になりたい人（なりたくない人）などをあげさせることによって、そのデータからさまざまな指数を算出したり、構造をグラフ化してとらえることができる。しかし、こうした質問をすることによって、好悪の感情が顕在化され、のちの関係に悪影響を及ぼすのではないかと懸念もある。そこで、研究目的のためと称してソシオメトリーを実施することについては、最近かなり慎重になっており、学会の倫理委員会等でも議論されている。少なくともそうした手法を用いた研究の場合には、実施の必要性や実施時の配慮について、論文中に記載することが望ましい。

われるものである以上、どのような影響を他に与えるのかについて、私たちは無関心でいるわけにはいかない。その実施方法や、結果の公表のしかたについては、細心の注意が必要である。

1.2.3 社会的な営みとしての研究

以上述べてきたような研究の価値というのは、個人レベルだけで考えられるものではないことをあらためて強調しておきたい。もちろん、「自分にとって情動的価値や実用的価値のある研究」であることは研究を行う場合の必要条件であり、これがなければそもそも研究をやっているとは思わないだろう。しかし、それだけでは自己満足として終わってしまう。

研究を社会的な営みとして考えるとき、情動的価値とは、より多くの人々がそこに意外性や確実性を見出せることにほかならない。つまり、他の人たちに「そんなことはわかっている」と言われないものが望ましいということである。一方、実用的価値とは、「そんなことを調べて何になるのか」という問いに答えようということである。

とくに、卒業論文や修士論文を越えて、研究者として行っていく研究は社会的な「知識の生産」であり、いわば人類全体が歴史を通して行っている活動への参加とも言えるのである。つまり、その学問で蓄積されてきた知識に新たな知見、理論、方法論を付け加えるわけである。これは通常は、学会発表、論文、著書などを通じて社会的な評価を受け、吟味されることによって行われる。とりわけ学術雑誌論文については、新しい研究内容といえるかどうか、結論の出し方に方法論的な問題はないかということが厳しく審査されるのが普通である。論文の審査については、第8章であらためて触れることにする。

1.3 心理学の研究の特徴とその過程

1.3.1 探索型研究と検証型研究

研究とは知識の生産であるということを、これまでくりかえし述べてきた。ところで、知識とは、「…は〇〇である」という命題の集合として表現される（コラム1-3参照）。「言葉の習得は幼児期がもっとも効率的である」、「人間

現時点で十分な程度に。

コラム1-3 「命題」とは何か

命題 (proposition) というのは、真偽を定めることのできるような事実内容を、一定の形式であらわしたものであり、必ずしも文の形式をとらなくてもかまわない。論理式や数式、あるいはグラフや図式などであらわされていてもさしつかえないのである。心理学で「モデル」とよばれるものも、現象を説明する理論の一種であり、命題を集積したものである。ちなみに、認知心理学では1970年代に「イメージ論争」とよばれる論争が起こり、「イメージは命題である」と主張する命題派と、イメージ表象の独自性を主張するイメージ派とが議論を戦わせた(市川, 2001)。命題派の主張は当初理解されにくかったが、人間のイメージは写真やビデオ画像のような像のまごとの保存ではなく、構造や意味をもったものであり、それは命題によって記述されるものであるということだった。これは、言葉の記憶がテープレコーダーのような「記録」とは異なり、意味内容を抽出して保存しているのに対応している。

は時がたつとものを忘れる」, 「内気な人は積極的な人を友人に選ぶ傾向がある」などというように、真偽はともかくとして、日常的経験から私たちは人間の心理についてさまざまな特性を抽出したり、それらの説明を生み出したりしており、それが命題となって個々人の知識体系をなしている。この素朴な知識体系をより裏づけがあり、精緻で論理的整合性のあるものにしていくことが、心理学の研究の過程ということになる。

ここで、心理学的命題を提出する探索型研究と、仮説的な命題の真偽を確かめる検証型研究とに研究のタイプを大きく2つに分けることができる。探索型研究は、興味のある対象について、行動観察をしたり、面接をしたりして、多くの情報を収集することからはじめ、そこから何らかの一般的な結論や、理論的説明をつくっていくことになる。こうした研究タイプは、いわば「ボトムアップ的」である。それに対して、検証型研究では、あらかじめたてた仮説が正しいとするとどのような結果が生じるか、逆に正しくなければどのような結果になるかを演繹的に予測して、実験や調査によるデータから決着をつけようとする。これは「トップダウン型」ということができよう(コラム1-4参照)。

既に知54218

一般理論の法則のもとに目の前の問題の答えを出すこと

コラム1-4 ボトムアップとトップダウン

どちらも認知心理学でよく使われる用語である。もともとは手書き文字の認識のようなパターン認識の領域で、それぞれのパターンの特徴を分析してあてはめていくのがボトムアップで、知識や文脈情報を利用して仮説を立て、可能性を限定していくのがトップダウンである。文章や会話において相手の意図を理解する場合でも同様に、構文の解析や単語の意味から積み重ねて解釈をつくっていくのがボトムアップであり、仮説や期待をもって理解をすすめていこうとするのがトップダウンである。研究もデータと対話しながら理解を形成していく過程であると考えれば、この2つの区別があることがわかるだろう。

どちらの研究タイプにおいても、近代以降の心理学は、日常生活における経験を越えて何らかのデータを収集して考察をすすめるという方法をとっていることに注意してほしい。その点こそが、文学や哲学とは一線を画する心理学の大きな特徴になっているのである。ただし、用いる研究方法は探索型と検証型とではかなり異なっている。心理学の歴史の中では、検証型研究のほうが自然科学的な方法を取り入れて先に方法論的に整備されてきたといういきさつがある。探索的研究は、研究者の洞察や直観に頼る部分が比較的多く、科学的方法論として定式化したり訓練したりしにくい面がある。しかし、最近は現実場面での観察の記述や臨床的実践から仮説を練り上げていく方法が重要視されつつある。本書では、そうした新しい方法論についても解説していく。

1.3.2 量的データと質的データ

研究のタイプに関連して、「量的」なデータと「質的」なデータの違いについても、ここで触れておきたい。量的データとは、数値で表現されているデータのことで、心理テストの得点などがその典型である。このようなデータは、平均、標準偏差、相関係数などをはじめとして、さまざまな統計的な指標をとってそれを分析することができる。一般の統計学での方法に加えて、心理学の中でも独自の測定法や分析手法が開発されてきている。それに対して、行動観察記録、

会話記録、内省的な言語報告などのような記述的なデータを質的データとよんでいる。質的データは、カテゴリーに分類するなどして、量的データにして分析することもあるが、むしろ量には還元しにくい内容的な側面に着目して考察がなされることにその特色がある。

探索型研究では質的データがとられることが多く、検証型研究では量的データが使われることが多いという大まかな対応はあるが、絶対的なものではない。まだ仮説が煮詰まらない探索的段階でひとまずさまざまな量的データをとってみることもあれば、はっきりした仮説を検証するのに詳細な質的データを用いる場合もある。質的データから仮説を検証していく方法は、人文科学では資料を用いた考証として一般的に行われてきたが、心理学においてはむしろ疎んじられていたきらいがあった。最近では、フィールドワークや臨床研究の発展に伴って、心理学における独自の質的データの利用がなされつつある。

1.3.3 調査・実験・実践

心理学では、どのような場でデータをとるかに関しても、3つの大きなタイプがある。ここでいう「場」とは、研究者が研究のために設定する状況のことと思ってよい。心理学が扱うのは基本的には人間（あるいは、他の動物のこともある）の心理的行動であるから、彼らとどのような関係のもとにどのようなデータをとるのかということが、つねに問題となる。

第1は、研究者から対象者にあまり影響を与えることなく、通常の意識や行動についての情報を得ようとするもので、総称すると調査ということになる。ここでは、観察、インタビュー、質問紙調査などの方法が主に採用される。第2は実験であり、日常的な場面にはないような状況を研究目的のために設定するものである。これは、厳密な測定を行ったり、条件間の比較をしったりする場合に行われる。第3は実践であり、教育場面や治療場面のようになり、研究者が対象者にはたらきかける（心理学ではしばしば「介入する」といわれる）という関係を持ちながら、対象者に対する援助と研究を同時に行っていくものである。

これら3つの場の相互の関係は次のようにまとめることができる。まず、対象への関与という観点から見ると、調査ではその影響を最小限にしてできるだけありのままにしておきたいというのに対して、実験では状況づくりや実験的

な操作を行い、実践では対象者の状態の改善をめざすという形で、積極的な関与をはかる。状況の人工性という観点から見ると、実験はあえて日常にはないような状況を作りだそうとする点で人工的であり、調査と実践は、対象者の現実的な日常生活の中で行われる。また、研究者と対象者の関係性のあり方という視点から見ると、調査と実験では対象者を第3人称的に対象化してとらえるのに対して、実践の場合には「わたしとあなた」という第1・2人称な関わり方をもつ。つまり、実践では研究者の個性や関係のもち方が重要な要因となっている。

このように、3つの研究の場は、相互に類似点と相違点をもちながら、心理学の研究の中で相補い合って存在している。とりわけ発達・教育・臨床などの領域では、この3つの場が密接な関わりをもっているといえるだろう。第2章以降でも、それぞれに応じた固有の研究方法を解説していくことになる。

1.3.4 心理学研究の過程

心理学の研究はけっして単線的なものではない。つまり、あるひとつのテーマをめぐる、データの収集と考察とが行きつ戻りつしながらしだいに認識が深められていくプロセスである。これは、一人の研究者の中でもそうであるし、研究者の共同体である学界の中でもそうである。しかし、あえて話をわかりやすくするために、ここでは時間的に短い単位をとりだして、心理学の研究がどのようにすすめられるかを大まかに見ておこう。

- ① 問題の設定——研究は、自分が何に関心をもち、何を知りたいと思うかをはっきりさせることから始まる。その関心は、日常的な経験から生じることもある。それまでに行った調査、実験、実践から生じることもある。また、学術的な文献を読んでいて起こってくることもあるかもしれない。ともかく、「自分はこの研究において何を明らかにしたいのか」というリサーチ・クエスチョンをはっきりさせる必要がある。これは、研究の目的を明確にするということにはかならない。ここで大切になるのは、1.2節で述べたように、その研究がどういう意義があるかということである。今調べようとしていることが仮にわかったとして、どのような情報的価値があるのか、実用的価値があるのかということをよく考えておきたい。

- ② データの収集——探索型の研究も、検証型の研究も、データにもとづいてすすめられることが心理学の特徴であることを述べた。データとは、研究対象についての情報を記述したものである。ここでは、具体的にどのような方法でデータをとるのかということが大きな問題になる。心理学では、観察や面接の記録、自由記述の質問紙、段階評定式の質問紙、能力を測定するテスト、実験場面での正答率や反応時間など、さまざまなデータのとり方がある。「〇〇について調べたい」とか、「〇〇であるということを確かめたい」という漠然とした関心や仮説は、データ収集の段階では「どのようなデータによってそれを示すのか」という具体的な方法に結び付けられていなくてはならない。そこで、重要になってくるのは予備調査や予備実験などの事前準備である。これは日常的な経験を一步越えた、最初の意図的なデータ収集である。さまざまな方法を試してみて、大まかな分析で手ごたえをつかみ、研究の目的と方法をはっきりさせることが大切である。
- ③ 分析と解釈——得られたデータを分析し、解釈することもまた、データ収集の方法と並んで、研究プロセスの中核的な部分である。探索型研究の場合には、データを整理する枠組みを考えたり、何らかの法則性を発見したり、現象をうまく説明できそうな理論的考察を行ったりすることになる。検証型研究の場合には、仮説的命題の中にあらわれる内容がどのデータに対応するのかをはっきりさせ、仮説を支持する結果になっているのか否かを検討していく。どちらの場合でも、量的なデータに対しては、第3～5章で述べるようなさまざまな統計的手法がよく使われる。グラフによって視覚化したり、「多変量解析」と言われる手法で大量のデータの諸関係を把握したりする方法は、最近のコンピュータの普及によって容易に行えるようになり、探索型研究でも検証型研究でも有効に使われている。また、仮説の検証のひとつの方法として、心理学研究では「統計的検定」が伝統的によく使われ、これも計算自体はコンピュータによって簡単に行えるようになっている。しかし、分析や解釈は、データをコンピュータにかければ自動的に出てくるというものではけっしてない。統計的手法を適用した結果の意味するところを理解し、どのような心理学的な命題として結実させるかは、あくまでも研究者ひとりひとりにかかっているのである。

- ④ 研究の発表——研究の成果は、報告書（レポート）や論文のような文章としてまとめられることもあれば、研究会や学会での口頭発表の形で公表されることもある。研究を発表するということは、研究者自身にとってはあらためて自分の考えを整理し、検討し直すという意義がある。データを取ったり分析をしているときにもまして、論文を書いたり口頭発表の準備をしたりしているときに、新しい問題点を発見したり、自分の主張が明確になってくることがある。また、研究を発表するということは、他者への情報提供であり、他者からの意見を受けるという社会的なコミュニケーションの機会でもある。研究でわかったことを共有することによって、対象に対する認識はお互いに高まり、さらにその上に立って次の研究をすすめることができるのである。ここでは、相互に批判検討しあうことが、よりよい研究にしていくための重要なステップになる。したがって、研究の途中段階でも中間報告や中間発表会などを行うことが大切である。研究発表は研究の終わりではなく、つねに次の研究をすすめるための過程であると考えてほしい。

1.4 研究に向けての学習

1.4.1 どのような学習が必要か

この章では、研究するとはどういうことなのか、どのようにすすめられるのかというごく大雑把な枠組みを示してきた。そこで、章のまとめを兼ねて、これからの本格的な研究に向けてどのような学習をする必要があるのかを述べよう。

- ① 読んで学ぶ——興味をもった対象や研究領域について、これまで何がわかっているのか、いま何が問題にされているのかを知ることは、研究の情報的価値に関わることであるので、まず調べておくことが必要である。内外の書籍に加えて、学術雑誌や学会発表論文集にあたることによって、最新の動向を知ることができる。また、実践に関わる領域では、実践者（保育者、教師、カウンセラーなど）向けの雑誌や書籍に目を通しておけば、現場ではどのようなことが問題になっているのかがわかる。これは、研究

の実用的価値がどれくらいあるのかを知る手がかりになる。社会のニーズから問題意識を喚起されてテーマが生まれてくることもあるだろう。

- ② 使って学ぶ——心理学における基本的な方法を一通り身につけておくことが望ましい。たとえば、行動観察、授業観察、質問紙調査、面接法、心理テスト、実験計画、統計的データ解析などが主なものとなる。大学の心理学系のコースでは必ずといってよいほど、カリキュラムの中にこれらの技能の習得を目指す実習が含まれている。解説書を読んだだけではなかなかこうした方法は理解できないので、使いながら学び、レポートとしてまとめていくという学習が不可欠である。もちろん、できあいの方法だけで必ずしも事足りるわけではなく、自分のテーマに応じて新たな方法を工夫する必要も出てくるが、あらかじめレパートリーとしていくつかの方法を知っていることにより、発想にも幅が出てくる。また、現実問題としては、テーマを決めてからごく初歩的な研究方法を学び直すというのではとても間に合わないものである。

- ③ 関わって学ぶ——教育や臨床などの領域は、とくに実践現場と関わりが深いことを考えると、自ら現場に出て人々と積極的に関わる経験をもつことが大切である。わが国ではややもすると心理学研究が社会的な実践から乖離しがちであった。その批判が心理学の内外から高まっている今日、現場をよく知る心理学全体にとって非常に重要な課題でもある。「文献の中からできそうな問題を探し、既存の方法を適用して結果をまとめる」というだけでは、実践に役立つ研究はなかなかできない。何を問題にするべきかということは、現場の中に身をおいてみることから生じる。そのきっかけを作ることははじめは難しく感じられるかもしれないが、ボランティア活動や研究会などを通じて現場の人たちと接する機会をもつことや、一方的に観察や調査をさせてもらうのではなく現場で協力できることをしていくことが大切である。

さらに、私たちの関心が人間の心理にある以上、心理学だけに留まらず、ほかの学問や日常的経験から人間についての認識を広め深めていく努力が求められる。学習者・研究者によってどの方面に関心を延ばすかは当然異なってくるで

あろうが、異分野の知識が研究に独特の色合いを添えることはしばしばあるし、新しい研究はそこから生まれることが多いものである。また、研究の中に占める発表や討論の比重が高いことを考えると、わかりやすい文章を書いたり、相手の言うことを理解して意見を述べるなどのコミュニケーションスキルが非常に重要である。ここに述べたことはかなり日常的で一般的なことであるが、心理学の研究もこうした基礎の上に成り立っていることに十分注意したいものである。

以下参考

1.4.2 本書の構成

本書はこれから心理学の研究を進めていこうとする学生に対して、心理学の方法論を中心に解説したものである。前述したような「研究に向けての学習」のための教科書として、基礎的な事項を中心に、最近の動向も考慮しつつ広いテーマをとりあげた。

第2章から第4章までは、質的調査（観察、面接、フィールドワークなど）、量的調査（質問紙作成、尺度構成、相関分析、統計的仮説検定など）、実験法（実験計画、実験データの処理など）を解説する。これらは、心理学の基礎研究の核となるものなので、典型的な研究事例を参照しながら、研究がどのような論理にもとづいているのかを詳しく述べた。読者には、それぞれの方法の基本的な考え方をじっくりとつかみとってほしい。

第5章から第7章では、実践に関わる領域に特有の問題をテーマに、さらに詳しい解説がなされている。現実の教育や臨床の場面ではなかなか条件の整った実験を実施できないときがある。第5章の「準実験」は、そのような場合にもできるだけ妥当な結論を引き出すための方法である。第5章では単一の事例を対象にした実験法についても解説している。第6章では、「アクションリサーチ」をキーワードに、教育や発達における実践研究がどのように行われるか、それを研究するのに必要な要件は何かを述べる。第7章は、カウンセリングや心理療法などの心理臨床場面での研究がいかなるかなされるかを解説している。この分野では、面接、心理テスト、治療などの基本的な技能の習得とともに、個別的に対象者と関わる過程を内省的にとらえて研究として高めていくことが必要とされる。

このように本書は、従来の心理学研究で主流であった実験的方法や統計的分析だけでなく、質的研究や実践研究の方法論についても多くの解説を加えている点が特徴といえる。現在の心理学は、さまざまな研究方法が開発されてパラダイムが急速に広がりつつある時期にあたる。読者は、そうした動向の中で、自分なりの方法を見出し、考え出していくという方向性や心構えをもちつつ、本書から基礎的な考え方を汲み取ってほしい。

❖キーワード

日常的経験、勉強と研究、研究の情報的価値と実用的価値、命題、探索型研究と検証型研究、ボトムアップとトップダウン、量的データと質的データ、調査、実験、実践、研究の過程、リサーチ・クエスチョン、予備調査、予備実験、研究に向けての学習

❖参考図書

心理学研究法の古典ともいえるシリーズは、続有恒・八木晃監修の「心理学研究法」(全17巻、東京大学出版会)である。刊行が1970年代なので、やや古くなってしまった感はあるが、基礎からじっくりと学びたい人にとっては、今でも貴重な教科書である。

逆に、新しい方法論を幅広く具体的に紹介したものとして、現在刊行中の「シリーズ・心理学の技法」(福村出版)がある。すでに、認知、性格、発達、社会心理学、臨床心理学、教育心理学の6巻が「〇〇研究の技法」という書名で出版されている。通読する教科書というよりは、事典のように関心と必要に応じて項目を拾い読みするのに便利である。

心理学研究法全般に関する入門書はあまり多くないが、末永(1987)は、社会心理学という領域上、比較的広い話題を基礎から扱っている。測定法に焦点をあてて、心理学の研究法を解説した市川(1991)は、大学初年から卒業研究くらいまで使える入門書である。

❖引用文献

- 市川伸一(編) 1991 心理測定法への招待——測定から見た心理学入門 サイエンス社
- 市川伸一 2001 イメージと理解——「イメージを理解すること」と「イメージで理解すること」 菱谷晋介(編) イメージの世界 ナカニシヤ出版(印刷中)
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition,

- emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Moreno, J. L. 1953 *Who shall survive?* Beacon House.
- Shannon, C. E. 1948 The mathematical theory of communication. *Bell-System Technical Journal*, July and October. 長谷川淳・井上光洋(訳) 1969 コミュニケーションの数学的理論 明治図書(翻訳はShannon, C. E., & Weaver, W. 1967 *The mathematical theory of communication*. The University of Illinois Press. 所収論文より)
- シリーズ・心理学の技法 1999- (既刊6巻, 続刊中) 福村出版
- 末永俊郎(編) 1987 社会心理学研究入門 東京大学出版会
- 高野陽太郎・櫻坂英子 1997 “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”——通説の再検討 心理学研究, 68, 312-327.
- 田中熊次郎 1981 ソシオメトリー入門 明治図書
- 続 有恒・八木 晃(監) 1972-75 心理学研究法 全17巻 東京大学出版会

が心理的構成概念を適切に反映しているかどうかを確認する作業が行われる(5章)。

②-追

1-4 研究の過程

では次に、実証研究がどのように行われるのか、その過程を概観してみよう。社会心理学に限らず、一般に心理学の研究は以下の流れに沿って行われるのが普通である。それぞれのステップと本書の各章を対応づけながら、この流れを簡単に見ていくことにする。

- ① 問題の設定：どのような問題を研究対象とするかは、経済的、倫理的側面などの制約はあるものの、研究を行う人の自由である。しかし、その「自由」のためにかえって何をテーマにしたらいいいのか迷ってしまうことも多い。2章では、書籍やインターネットを通じて必要な情報を探索したり積極的に他者と交流したりして研究すべき問題を見出し、それをどのように研究可能な形にするかが説明される。
- ② 文献のレビュー：研究する領域が決まったら、関連する文献を収集して、これまでに何が明らかにされているのかを把握する。それに基づいて、自分が行う研究によってどのような知識を加えることができるのかを考える(2章、8章)。
- ③ 仮説の設定：次に、研究によってどのような点を明らかにするのかを仮説(hypothesis)の形で述べる。多くの場合、これは二つ(あるいは、それ以上)の変数の関係についての「見込み」、あるいは「暫定的な説明」として言語的に表現される。必ず仮説を生み出すことができる確実な方法があるわけではないが、その可能性を高める方法(ヒューリスティックス)がまとめられているので、いろいろな方法を試してみることができる(2章)。
- ④ 研究法の選択：データの収集法には、それぞれ長所と短所がある。そこで、これらを比較考量して、仮説を検証するためにはどの方法が適切か決める。最適の方法を採用できる場合もあるし、経済的コストや研究スペース、研究参加者や倫理的問題から、次善の方法を選択せざるを得ない場合や、複数の方法が併用されることもある。研究目的と、自分が置かれた研

究環境の制約・利点を十分に考慮して「最適解」を求める姿勢が必要とされる(3章)。

- ⑤ 資料収集の企画：研究の方法が決まったら、実験デザイン、教示など、具体的な手続きを検討する。これを怠ると、せっかくデータを収集しても分析が困難となることもある。どのような測定法を用いるかも重要な問題である(4章)。また、研究機関によっては、この時点で研究倫理委員会に企画書を提出して承認を受けることが求められる。
- ⑥ 予備実験(調査)：予備実験(調査)は、本調査・本実験をスムーズに進行させるための重要なステップである。調査の場合、これによっておおよその回答時間がわかるし、用語や回答形式をさらに適切なものにする手がかりが得られる(10章)。実験の場合には、少数の人を対象にして手続き通りに実験場面を展開し、実験場面において感じたことや考えたことを尋ねてみる。研究する側は自分の立場から実験場面を理解しがちであるが、実験参加者の目からは教示が不自然だったり、理解に苦しむ部分があったりするものである(8章)。なお、本書では、実験や調査の全体ではなく、その一部の過程(たとえば、独立変数の操作や従属変数の測定)について事前にテストすることをパイロット・テスト、全体について試験的に行う場合を、パイロット実験(調査)あるいは予備実験(調査)と呼ぶことにする。
- ⑦ 資料の収集：研究参加者の募集準備が整ったら、いよいよデータの収集にとりかかる。本書では、とくに実験法に重点を置いているが(6~8章)、観察法(9章)、社会調査法(10章)に関しても、それぞれの具体的方法や、実施に際しての注意点について記述されている。測定(4章)や尺度構成(5章)に関しても、基本的な注意事項がまとめられている。
- ⑧ 資料の整理・分析：データを収集したら、それらをチェックし、必要であればさらに分析に適した形に変換して、あらかじめ決められた方針に従って手際よく分析する。とくに、どのような分析を行えば仮説の検討を適切に行えるかを第一に考える。本書では、具体的な統計的手法を解説する章を設けてはいないが、優れた書籍が多数出版されているので、これらを参考にとよい。また、SPSSなど統計パッケージは強力な助けとなるので、使用法に精通しておくことも重要である(4章)。

⑨ 結果の解釈：資料の分析が終わったら、その結果を仮説と対比させ、仮説が妥当なものであるか否かを検討する。さらに、研究を実施する過程で明らかになった手続きの不備や解釈のあいまいさなどがあればそれを考察する。本書では実験法に関する6～8章および論文作成を解説する11章の一部でこの問題が扱われる。卒論研究の場合には1回の研究で終了することが多いが、専門的な研究者が行う場合には、ここで検討された事柄に基づいて不備な点を修正して研究を繰り返したり、得られた結果から新しい仮説を生み出し、それを検証するための研究を展開していくのが普通である。

⑩ 論文（レポート）の作成：研究によって得られた知識を広く公表することは、研究のステップとして極めて重要な位置を占める。論文を読んだ他の研究者が、その内容に触発されて関連研究を始めることもあるし、さまざまな形で行われる建設的な批判は問題点を明確にさせる。現実の問題の解決に役立つ研究が報告されれば、その知識を実際に応用する研究が行われ、その結果はもとの研究の妥当性を評価する材料となる。心理学関係の論文では、手続きや結果の提示の仕方などに関して慣例的なスタイルがあるので、これに従って記述するのがよい（11章）。

⑪ 学会発表・専門誌への投稿：研究の成果は、学会発表や専門誌へ投稿することによって学界全体の知識体系の一部となる。投稿にあたっては、必ず指導教員や先輩、友人に目を通してもらい、その完成度を高めておく。編集や審査にあたる会員は、あくまでも日常の研究・教育の他にボランティアとしてこれらの業務を行っていることを忘れるべきではない。本書では扱わないが、審査がどのような過程で行われるかを十分に知った上で、審査結果に対応することが必要である（Kazdin, 2003; Tesser, Martin, & Sternberg, 2006）。

⑫ 事後的な作業：研究が終了したら、研究参加者や関係者に対して謝意を表すと同時に、報告書あるいはその要約を渡して十分な説明を行う。また、データの再分析が必要になることもあるので、回答済みの調査用紙と統計的分析に用いたデータを一定期間保持している必要がある。学会によっては、採択された論文のデータを保持すべき期間を定めている場合もある。

その際、プライバシーの保護について十分に配慮する。

この章では、実証研究の基本的な考え方と、実際の研究の流れについて述べた。以下の各章では、この流れに沿って各種の研究法や論文の書き方について具体的に説明を加える。読者の方々は、これら各論を読み進める中で、必要があれば本章に戻って研究の全体像を確認していただきたい。

- 角田 豊 1998 共感体験とカウンセリング 福村出版
- 河合隼雄 1986 心理療法論考 新曜社
- 小嶋謙四郎他 1978 絵画空想法図版——PRT試案 金子書房
- Langness, L. L., & Frank, G. 1981 *Lives: An anthropological approach to biography*. Chandler & Sharp Publishers. 米山俊直・小林多寿子(訳) 1993 ライフストーリー——研究入門——伝記への人類学的アプローチ ミネルヴァ書房
- 茂呂雄二(編) 1997 対話と知——談話の認知科学入門 新曜社
- 村瀬孝雄 1995 フォーカシング事始め 金子書房
- 西阪 仰 1990 心理療法の社会秩序——セラピーはいかにしてセラピーに作りあげられていくか 明治学院大学社会学部附属施設研究所年報, 20, 1-24.
- 大村彰道(編) 2000 教育心理学研究の技法 福村出版
- Psathas, G. 1995 *Conversation analysis: The study of talk-in-interaction*. Sage Publications. 北澤 裕・小松栄一(訳) 1998 会話分析の手法 マルジュ社
- Rogers, C. R. 1942 *Counselling and psychotherapy*. Houghton Mifflin Company. 佐治守夫(編) 友田不二男(訳) 1980 カウンセリング 改訂版 岩崎学術出版
- 佐治守夫・岡村達也・保坂 亨 1996 カウンセリングを学ぶ 東京大学出版会
- 下山晴彦 1990 「絵物語法」の研究——対象関係仮説の観点から 心理臨床学研究, 7 (3), 5-20.
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際 東京大学出版会
- 下山晴彦(編) 2000a 臨床心理学研究の技法 福村出版
- 下山晴彦 2000b 心理臨床の基礎1 心理臨床の発想と実践 岩波書店
- Strauss, A., & Corbin, J. 1990 *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. Sage Publications. 南 裕子(監訳) 1999 質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリーの技法と手順 医学書院
- やまだようこ(編) 1997 現場心理学の発想 新曜社
- 山本和郎 1992 心理検査 TAT かかわり分析 東京大学出版会
- 好井裕明・山田富秋・西阪 仰(編) 1999 会話分析への招待 世界思想社
- 吉村浩一 1989 心理学における事例研究法の役割 心理学評論, 32 (2), 177-196.

第8章

研究の展開

研究計画から発表・論文執筆まで

本書ではこれまで、心理学の研究の中核となる研究遂行の部分について、入門的な解説をしてきた。最後となる本章では、研究の入口にあたるテーマの設定や研究計画の部分、および研究の出口にあたる研究発表の部分について簡単に解説していく。また、通常はベテランの研究者が行うような論文査読、講演、パネルディスカッションといった活動を模擬的に行う学習形態として、RLA (Researcher-Like Activity) を紹介する。

8.1 テーマ設定と研究計画

8.1.1 テーマとの出会い

大学で卒業論文を作成するにあたって、「いったいどうやってテーマをみつければいいのでしょうか？」という声をよく聞く。少なくとも、心理学の卒業論文を書くには、「心理学的な問題を、心理学的な方法で研究する」のが基本である。「心理学的な問題」とはどういうものか、「心理学的な方法」とはどういうものかは、大学3年生までに講義やゼミを受けたり、自分でいくつかの本を読んだりしていれば、すでにイメージがつかめているはずである。もちろん、それらにあまり縛られると新しいアプローチを開拓していくことができない。しかし、卒業研究は、通常の場合、自ら計画をたてて研究をすすめていく初めての経験であろうから、方法論的には従来のオーソドックスなやり方を確実に身につけることを目標におきたい。その中で、テーマの斬新さ、実施や分析の創意工夫などを考えてほしい。

テーマをどのように選んでくるかは、次のようにさまざまである。

- ① 日常生活経験から——心理学、とくに、発達、学習、教育、適応などの問題は、日常生活に密着した事柄が多い。ふだんから、人間の心理的行動について、興味・関心をもちつづけ、自分でも「これはおもしろい」「大切だ」と思えるような現象に敏感でありたい。また、「こうしてみたら、人はどう行動するだろうか」、「なぜ、人はそのような行動をとるのか」ということを、心理学的な視点から考えてみよう。
- ② 授業や書物の内容から——講師の話の内容に触発されてテーマを選んだという学生は少なくない。また、関心があって読んだ本の中から、自分で確かめてみたくなったり、本当にそうなのか疑問が生じて、テーマが湧いてくる場合もある。コラム8-1に書いたように、そうした研究の追試から入るというのも、ひとつの手である。
- ③ 研究会等に参加して——大学院生、他大学の研究者、教員やカウンセラーなどを交えた研究会に参加していると、現在進行中の研究を聞くことができるし、その分野での研究動向もわかってくる。個人的に話をする機会ももてるだろう。こうしたコミュニケーションの中から、自分の興味をもった問題を選ぶことができる。

この段階では、必ずしも1つのテーマに絞り込まなくてもよい。ただし、「ぜひ、その問題について1年かけてじっくり追究してみたい」と思えるような、「自分にとってやりがいのあるテーマ」であることはもっとも大切な要件である。その中には、すでになされている研究だったり、そのままでは難しすぎてとても卒業研究では扱いきれないものもあるかもしれない。それらを考慮しながら、テーマを絞り込んで、より具体的な問題として設定していくのが次の段階となる。

8.1.2 先行研究の検索

興味をもったテーマについて、すでにどのような研究がなされているのかを調べることは研究の重要なステップである。しかし、大学3年生までの心理学の実習では、このことがあまり重視されていない。これは、それらの目的があくまでも研究遂行の技術を身につけるための「トレーニング」であったからで

コラム8-1 追試からはじめることも大切

ゼミや卒業研究では、すでに公表され論文になっている研究の追試からはじめるということもあってよいと思われる。自分で計画して研究を遂行するよい経験になるし、ひとたび調査や実験をしてみると、そこからまた新しい問題が生まれてくるものである。それを発展させて全体をひとつの論文とすればよいのである。また、追試の結果はそれ自体有用な学術的情報でもある。心理学の研究は再現性の高いものばかりとは限らず、かなり有名になった研究でも、追試では同じ結果が得られないことがある。

たとえば、ピグマリオン効果（ある生徒について「潜在的能力が高い」という情報を教師に与えておくと、教師の期待が成就して本当にその生徒の成績が良くなるという現象）に関する研究は、社会的にも非常にインパクトがあったが、その後の追試での再現性は低いと言われている。これは、他の条件によって大きく左右されやすい微妙な現象だからと考えられる。いったいどのような条件のもとでは、こうした現象が生じやすいのかを追試すれば、より本質的な要因に迫ることもできるかもしれないのである。追試研究の学術的な意義については、3.5節を参照してほしい。

ある。それに対して、卒業研究では、先行研究を踏まえて、その上に自分の研究を積み重ねるという姿勢が要求される。さらに、修士論文となると、実際に学会発表や学術論文の形で、その分野の発展に貢献する「業績」になりうる内容が期待される。自分が興味をもったテーマについて、ただ調査や実験を行い、その結果を出して考察するというだけでは不十分である。それでは第1章で述べた、「ひとりよがりな研究」ということになってしまう。

あるテーマについての先行研究を調べるには、次のような資料にあたってみるのが一般的である。

- ① 学会発表論文集——本書の内容に関係するところでは、日本心理学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本心理臨床学会といったような学会がある。ほとんどの学会は年に1度の大会を開き、多くの会員が研究を発表する。その要旨を集録した発表論文集が大学の図書館や研究室に置かれているであろうから、過去10年分くらいを調べればどのような研究

がなされているかわかる。1件の発表内容がふつうは1ページに簡潔にまとめられているので、読むのにあまり手間がかからないという長所があるし、研究のまとめ方のスタイルを学ぶこともできるだろう。ただし、十分詳しい情報が得られないことや、信憑性の高い研究ばかりではないことに注意する必要がある。あくまでも、「どのような研究があるのか」を知る手がかりと思ったほうが良いだろう。

- ② 学術雑誌論文——学会や専門機関が定期的に発行している学術雑誌には、審査を経た質の高い論文が掲載される。論文の長さは、通常10ページくらいであり、これを読みこなすのは、はじめのうちかなりたいへんであるが、卒業研究の場合には必ず通らなくてはいけない関門である。海外の学術雑誌文献にも目を通してほしい。現在では、欧米の学術雑誌はほとんどが英語で書かれている。英語での専門用語を卒業研究の際に知って英語論文を読むのになじんでおくことは、とくに大学院に進学しようとする学生には必要なことである。和文にしても、英文にしても、テーマを決めようという段階では、必ずしも論文の内容すべてをわかっておく必要はない。まずは、最新の研究の動向をつかみ、自分の問題意識を鮮明にすることで

ある。

③ レビュー論文と解説書——ある分野の研究の動向や重要な文献を知るのに、もっとも便利な方法は、いわゆるレビュー論文を読むことである。わが国では、『心理学評論』（心理学評論刊行会発行）が代表的なレビュー論文誌であり、さまざまな分野から投稿された論文が掲載されている。年に4号の発行だが、2号にひとつは、特定分野の「特集」が企画され、数人の著者が多方面から論文を寄せ合っている。その他の学術雑誌では、「展望論文」等の呼称でレビュー論文がときおり載せられる。アメリカ心理学連合（APA）発行の“*Psychological Review*”や“*Psychological Bulletin*”には、諸研究の網羅的紹介に終わらず、著者の理論的枠組みを提出するという趣旨にかなった、きわめて高水準の論文が掲載されているので、ぜひ目を通しておきたい。

- ④ 文献データベースの検索——最近では、コンピュータの文献データベースによって先行研究を検索することがかなり一般的になってきた。英文・和
- 日本語論文の場合、J Stage というサイトが一番ベテック。
他には Google Scholar も良い。

文、書籍・雑誌・新聞記事など、さまざまな資料がデータベース化され、著者名やキーワードを入力すれば検索してくれる。ホストコンピュータに接続してオンラインで検索するもの、WWW（world wide web）で検索するもの、CD-ROMを購入して検索するものなどいろいろあるので、図書館で種類と使い方について学ぶ必要がある。中でも、Citation Index のデータベース版である SCI（Science Citation Index）と、SSCI（Social Science Citation Index）は、ある論文を引用したその後の論文をリストアップするという便利な機能がある。つまり、ひとつの論文がその後どのように影響を与え、展開されていったかを追うことができるわけである。

以上のように、いくつかの方法を述べてきたが、ひとつの重要な原則は、「信憑性のある新しい文献を（できれば、いくつか）探しあてる」ということである。より新しい文献に出ている引用文献を手がかりに、逆に古いものへとさぐっていけば、その分野での重要な知見や理論がわかってくる。いくら有名なものでも、古い文献を見ただけでは、その後の流れがわからない。その意味では、Citation Index は古いものから新しいものへと検索する画期的なシステムといえるが、それだけに頼らず、新しい文献に目を通すことはここがけておきたい。

8.1.3 研究計画の作成と事前準備

テーマがある程度絞られてきたら、具体的な研究計画を立てることになる。はじめの段階で考えておく必要があるのは、次のようなことである。

題目：自分の行う研究の内容や方法が通じるような、簡潔にしてわかりやすい論文タイトルを考える。

目的と意義：何をどこまで調べるのか。それがわかることによって、学術的、もしくは実用的にどのような意義があるのか。

方法：だれを対象にどのようなデータをとるのか。量的なデータか、記述的なデータか。独立変数と従属変数は何か。

分析の見通し：得られたデータをどのように分析するのか。どのような分析手法により、どのような結果が得られることを期待しているのか。

論文題目は、最終的には変わってしまうことが多いので、仮のものでもかま

わない。しかし、題目を決めようとする中で、自分が何をやりたいのかを明確に考えさせられることになるので、つねにつけておくほうがよい。以下のいくつかの例は、東京大学教育学部教育心理学コース1999年度の卒業論文と修士論文題目からランダムに選んだものである。

〈卒業論文から〉

職業的観点から見た「生きがい感」について

現代青年の交友関係と自己開示

医療スタッフの患者に対する精神的支援に関する研究

コンピュータ画面提示と印刷物提示の違いによる文章理解への影響

統計既習者における条件付き確率としての有意水準の理解

——現状と改善のための方策

青年のペットに対する態度と対人態度の比較

——愛着理論と対象関係論の観点から

偏差値評価が学習者の内発的動機づけに与える影響

幼児における集団保育の社会的ルールの理解

糖尿病食事療法に関する患者の意識および行動の変化

〈修士論文から〉

Group Identity の成熟性に関する研究——青年期を対象にして

高校生の学習観の構造と学習方略への介入の効果

高校生の親子関係——関係の回避という側面から

問題解決における外的資源としての他者の役割

——地図構成課題の協同解決場面の分析から

反復測定の前実験データにおける処遇の効果の検出力

——構造方程式モデルによるアプローチ

これらを見ると、題目にはいくつかの要素があり、どれに焦点をあてるかでタイプがあることがわかる。大雑把に言えば、

- ・研究対象（対象者と現象）をあげたもの
- ・研究方法をあげたもの

・変数間関係や理論（モデル）をあげたもの

ということになる。望ましい題目とは、これらの要素が適度に組み合わせられ、「何をどのように研究したのか」が具体的に伝わりやすいものといえよう。「似たようなテーマを扱っている他者の論文との区別が明確になるように」というのも重要なポイントである。少なくとも、論文の題目は、本の書名と異なり、大きなテーマを掲げただけのものや、奇をてらったようなものは避けたほうがよい。

計画を立てた段階で、指導教官や上級生（学部学生ならば、大学院生やティーチング・アシスタント）と相談をすることになる。あるいは、初期段階での研究計画発表会を設けているところもあるかもしれない。「何をやりたいか」がはっきりしているほど、具体的なアドバイスがもらえる。また、すでに先行研究としてどういうものがあるかを自分なりに調べてあり、自分の研究の意義づけができていれば申し分ない。この段階でアドバイスを受ける必要があるのは、次のような点である。

- ・研究の意義や計画の現実性についての全般的な注意
- ・そのテーマに関連する文献や研究者の情報
- ・手続きや分析手法に関する問題点や、知っておくべき情報

さらに次の段階では、事前準備（予備調査や予備実験）を早目に行ってみることである。とくに、仮説検証的な研究や、質問紙尺度構成の研究では、いきなり本調査や本実験をして結果を得ようとするは無理がある。小さなサンプルについて実施してみて、質問項目の選定や表現のチェック、問題の困難度などに十分注意を払っておきたい。天井効果（問題がやさしすぎて満点近くに得点が集まってしまうこと）や床効果（問題が難しすぎて0点もしくは、チャンスレベル付近に得点が集まってしまうこと）のために、データとしての意味がなくなり期待していた差が検出できないことはしばしばある。これは、最後の考察時に「群間の差が見られなかったのは、問題がやさしすぎて天井効果が生じたためかもしれない」という弁解をすれば済むことではなく、事前準備の不足に帰せられることなのである。

2 問題の設定と仮説の構成

③ - 2

安藤清志

2-1 問題の設定

研究は、「何を研究するのか？」を決めることから始まる。もともと特定の問題に関心を持って心理学の勉強を始めた人も多いだろう。ただ、多くの場合、「援助行動について研究したい」「なぜ簡単に説得されてしまうのか知りたい」などのように関心の幅が広いので、その領域の中で何を研究するのかを決める必要がある。

追試 (replication) 研究は、主として専門誌に掲載されている論文と同じ研究を繰り返して行うので、何を研究するかは既に決定していることになる。ただし、まったく同じ研究を繰り返すことは希であり、独立変数や従属変数の操作を変更したり、新しい実験手続を用いて理論の検証を試みることが多い。その場合には、当然、自分の考えに基づいて決めていく部分が大きくなる。

とくに決まった領域がなければ、さまざまな手がかりを利用しながら、自分が研究する領域を探し出すことになる。大学の講義や演習では社会心理学の理論や過去の主要な研究について学ぶ機会が多い。その際には、講義内容を単に知識として蓄積するだけでなく、具体的にどのような研究を計画できるかを自分なりに考える姿勢をもつのがよい。この他にも、以下のように、研究すべき問題を発見する手がかりを得る方法がいくつかある (Leong & Muccio, 2006)。

2-1-1 自分の経験から考える

日常生活の中で、他者の行動について疑問に思ったり、自分の行動やこころの動きに興味をもったら、それを出発点にして問題を深めていくことができる。通学に使う電車の中で、席を譲ることや携帯電話の使用を巡って興味深い観察をすることがあるかもしれない。言われるままに必要なものを買わされた

り、高額の商品を買う契約をして解約するのに苦労した経験があったとしたら、なぜ自分がそのような行動をとったのかを考えるのも役立つ (Cialdini, 2008)。自分が「発見」した問題について他の人が既に研究を実施していることも多いが、それらを暫定的に研究の対象としていろいろと調べてみる。自分が関心をもった問題は、簡単に諦めずに大切に育てることが大切である。

2-1-2 他者に尋ねる

他人に頼らずに一人で考えるのもよいが、他者の考えに触れることによって自らのアイデアが触発されることも多い。身近なところでは、同じ学科の友人と議論をしたり、指導教員から話を聞く時間を積極的に求めることができる。また、心理学関係の学会の年次大会やシンポジウムに参加して最新の研究に接してみるのがよい。ほとんどの学会は、学会員以外の人「当日会員」として参加することを認めている。また、心理学関係の大学院が設置されている大学ごと、あるいは、関心領域ごとに、定期的に研究会を開催しているグループがあるので、それらに参加してみるのもよい。インターネットを介しての情報交換も盛んである。身近な教員や大学院生に尋ねてみると、その人がなぜ現在の研究を行っているかも含めて、興味深い話を聞けることもある。研究者が個人で研究用のホームページをもっている場合もあるので、自分の関心に近い研究者のホームページを探すことができれば、さらに絞った内容の情報を得ることができる。

2-1-3 メディアに接する

メディアに関する情報に普段から関心をもって接していれば、心理学に関する話題を扱うニュースや記事の特集に接することができる。こうした情報から関心のある問題に出会うこともあるだろう (三井・中島, 2001, 2002)。たとえば、社会的排斥に関する一連の研究を行った Williams は (コラム1参照)、陸軍士官学校の一学生に対する仲間からの徹底的な排斥を扱ったテレビ番組を観たことが研究のきっかけになったという (Williams, 2008)。多くの大学図書館は内外の新聞・雑誌記事の検索ができるデータベースを備えているので、これを利用することもできる。

表 2-1 社会心理学関係の学会と機関誌

学 会	機 関 誌
日本社会心理学会	『社会心理学研究』
日本グループ・ダイナミックス学会	『実験社会心理学研究』
日本パーソナリティ心理学会	『パーソナリティ研究』
産業・組織心理学会	『産業・組織心理学研究』
日本心理学会	『心理学研究』
日本教育心理学会	『教育心理学研究』
日本認知心理学会	『認知心理学研究』
日本感情心理学会	『感情心理学研究』

2-1-4 雑誌論文などを読む

前述のように心理学関係学会の大会に参加して研究者と接することは重要な情報源となるが、参加しなくても大会の「発表論文集」に目を通せば最近の研究動向を知ることができる。ただし、発表論文集では1件に1~2頁しか割りあてられていないので、内容的には「要約」に近い。そこで、研究の詳しい内容まで知るためには学会機関誌の掲載論文を読むことになる。日本心理学会、日本社会心理学会など、いくつかの学会では、大会発表論文集をウェブ上で公開している。社会心理学関連の主要な学会および学会誌 (日本語のみ) は表2-1に示されている。なお、ほとんどの雑誌はデータベース化されているので、各学会ホームページをご覧いただきたい (一般社団法人日本心理学諸学会連合のホームページ (<https://jupa.jp/>) の加盟学会一覧から入るのが便利である)。

英文の雑誌も慣れればかなりの部分を読みこなすことができるので、学士課程の頃から臆することなく積極的に目を通すべきである。英文誌の中で社会心理学関係の論文が掲載される代表的なものが表2-2にあげられている。これらの中に図書館で購入しているものがあれば、定期的に最新号の目次やアブストラクトをチェックする習慣をつけるとよい。現時点でどのような話題が研究者の関心を惹きつけているのかがわかる。

また、関心領域が少し狭まってきたら、その領域の研究を扱った最新の展望 (レビュー) 論文を探してみる。展望論文というのは、ある研究領域でこれまで行われてきた研究について、著者の視点から整理して問題点や研究の方向性などについて検討する論文である。優れた展望論文が見つければ、その著者の助けを借りて当該領域の全貌を短時間に概観することができる。ただし、展望論

表 2-2 社会心理学関係の主要な英文誌

Journal of Personality and Social Psychology
Journal of Experimental Social Psychology
Personality and Social Psychology Bulletin
European Journal of Social Psychology
Asian Journal of Social Psychology
Journal of Applied Social Psychology
Journal of Personality
Social Cognition
Journal of Social and Clinical Psychology

文はあくまでその著者の「独自の」視点からの概観であることには注意をしておきたい。展望論文は、日本語の場合、各学会の機関誌に不定期に掲載されることがあるので論文タイトルなどから調べる。展望論文を中心とする『心理学評論』や『児童心理学の進歩』（年刊）にも、社会心理学に関係するテーマが扱われることがある。英文誌の場合は、多くの大学図書館に置かれている“*Annual Review of Psychology*”や“*Psychological Bulletin*”の他、“*Review of General Psychology*”や“*Personality and Social Psychology Review*”がある。心理科学学会（Association for Psychological Science: APS）が発行している“*Current Directions in Psychological Science*”や“*Perspectives on Psychological Science*”は、それぞれの領域をリードする研究者が一年連の研究成果を比較的平易にまとめた論文が多く掲載されている。また、オンラインジャーナル“*Social and Personality Psychology Compass*”にも最近の話題を短くまとめた論文が数多く含まれている。

また、特定の領域の主要な論文を集めたリーディングズも、その全体像について把握する際に便利に利用できる。ハンドブックや百科事典（エンサイクロペディア）も、最近出版されたものであれば、特定の研究領域で扱われている問題を総覧するのに便利である。社会心理学全体を扱うものとしては、“*Encyclopedia of social psychology*”（Baumeister & Vohs, 2007），“*The SAGE handbook of social psychology*”（Hogg & Cooper, 2003）などがある。多少古くなるが、『対人社会心理学重要研究集 1～7』（誠信書房, 1987-99）では社会心理学の各領域における重要論文が詳しく紹介されている。

2-1-5 データベースを利用する

膨大な数の文献も、心理学関係のデータベースを利用することによって効率的に検索することができる。代表的なものとして米国心理学会（American Psychological Association: APA）が提供する PsycINFO（サイコインフォ）があり、

文はあくまでその著者の「独自の」視点からの概観であることには注意をしておきたい。展望論文は、日本語の場合、各学会の機関誌に不定期に掲載されることがあるので論文タイトルなどから調べる。展望論文を中心とする『心理学評論』や『児童心理学の進歩』（年刊）にも、社会心理学

大学図書館に導入されていれば利用することができる。費用はかかるが、個人でも年間利用契約は可能である。PsycINFO には心理学とその関連諸分野の雑誌論文のほか、学位論文、書籍、書籍の各章（編集本の場合）の要約、引用文献と書誌情報等が収録されている。なお、これには日本の主要な心理学関係の雑誌に掲載された論文も含まれる。国立情報学研究所が提供している CiNii（サイニイ）は、学術雑誌、発表論文集、大学の研究紀要などの学術論文情報が検索できるデータベースである。また、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が運営する J-STAGE は電子ジャーナルの無料公開システムであり、ここにも心理学関係の多くの雑誌が公開されている。

検索の方法は、データベースに接続後に利用法（HELP）を読めば理解できる。わからないことがあっても、その時点での理解に基づいていろいろと試してみると、自分に適した使い方が身につくはずである。データベースを含め、インターネットを利用した情報収集についてはシュワープ・高橋・シュワープ・シュワープ（2005）が参考になる。

2-2 文献のレビュー

何を研究したいか領域がある程度定まってきたら、その領域で行われた過去の研究をレビューする。そのためには、単に論文のアブストラクトを読むのではなく、一つひとつ深く「読み込む」必要がある。そして、これまでに当該領域で何が明らかにされており、何が解決されていないかを調べることになる。

なお、論文の質にはばらつきがあるので、とくに追試研究を行う場合には注意が必要である。査読が行われている雑誌であればあまり問題はないが、紀要や報告書に掲載されている論文は十分に注意する必要がある。経験のある大学院生や教員と相談しながら、詳しく読むに値する論文を見極めるのがよい。とくに参考になる論文は、研究のデザインや具体的手続きについて、自分が研究を行う場合をイメージしながら読み進める（8章参照）。また、優れた論文を読むことは、自分が論文を書く際に役立つことも念頭に置いておこう（11章参照）。論文全体の構成、文章表現、論理の運び方など、学ぶべき点を常に意識しながら読むのがよい。

実際にはそんなに読み込めなくて
 フォーカス2つに絞って、何か明らかにしたか
 把握することはできる。

この目的に
 1つ1つの論文
 では、何と
 テマに
 研究結果と
 には何か
 明らかに
 したのか
 を中心に
 読むのがよい。

表 2-3 仮説生成のためのヒューリスティックス (McGuire, 1997)

I 日常の興味深い現象への注目

- (A) 一見奇妙な現象に注意を向けて説明を試みる
 - 1) 一般的傾向から逸脱している事柄を説明してみる
 - 2) 一般的傾向そのものが逸脱している点を説明してみる
- (B) 内観的な自己分析
 - 3) 類似した(複数の)状況における自分の経験を内観してみる
 - 4) 特定の状況における自分の行動を役割演技してみる
- (C) 回顧的比較
 - 5) すでに解決済みの類似した問題から推論してみる
 - 6) 正反対の問題を並置して、相互の解決法を検討してみる
- (D) 持続的、慎重な分析
 - 7) 集中的な事例研究
 - 8) 参加観察
 - 9) 命題の目録を集める

II 単純な概念分析(直接的な推論)

- (E) 平凡な命題の単純な転換
 - 10) ありふれた仮説の逆を説明してみる
 - 11) もっともらしい因果の方向を逆転してみる
 - 12) 明白な仮説を不可能に近い極限まで押し進めてみる
 - 13) ある変数の値をゼロにしたときの効果について想像してみる
 - 14) ある関係の限定条件となるような交互作用変数を考えてみる
- (F) 概念的分割からの洞察の倍加
 - 15) 言語的な探求
 - 16) 独立変数の操作の仕方をいくつか考える
 - 17) 従属変数をいくつかの下位尺度に分割してみる
 - 18) 出力となる下位要素を連続順に並べてみる
- (G) いつもの考え方からの脱却
 - 19) 問題の正反対の極へ注意を向け直してみる
 - 20) 好みの研究スタイルを別のスタイルに変えてみる
 - 21) 自分の仮説をいくつかのモダリティで表現してみる
 - 22) 通常の意識状態を中断してみる

III 複雑な概念分析

- (H) 演繹的推論
 - 23) ある関係についてさまざまな説明を試みる

- 24) 帰納と演繹を入れ替えてみる
- 25) 明白な関係を弱める要因を探してみる
- 26) 仮説-演繹による命題を考える
- (I) 思考を多様化する構造の利用
 - 27) アイデアを刺激するチェックリストを使用してみる
 - 28) アイデアが誘発されるような構造(マトリックスなど)を作ってみる
 - 29) 説明を公式化してみる
- (J) 刺激的思考のためのメタ理論の使用
 - 30) 進化的な機能主義(適応性)パラダイム
 - 31) 類推による概念化の転用
 - 32) 理論に執着し防衛してみる
- IV 過去の研究の再解釈
 - (K) 過去の一研究の徹底的検討
 - 33) 得られた関係の不規則性を説明してみる
 - 34) 非単調な関係を単純な関係に分解してみる
 - 35) 逸脱事例の分析
 - 36) 偶然得られた交互作用を解釈してみる
 - (L) 過去の複数の研究の統合
 - 37) 矛盾する結果や追試の失敗に対する調和的な説明を考えてみる
 - 38) 相補的な過去の研究を一つにまとめてみる
 - 39) ある領域における現時点の知見をレビューしてまとめてみる
- V 新たなデータの収集、古いデータの再解釈
 - (M) 質的分析
 - 40) 自由記述の内容分析を試みる
 - 41) 他人に任せず研究の細部(材料作りなど)に積極的に関わってみる
 - 42) 魅力的な研究技法を開発する
 - 43) 研究計画の中にコストの低い交互作用変数を導入してみる
 - 44) 交絡する要因を切り離して双方の影響を検討する
 - 45) 一連の研究プログラムの戦略的企画
 - (N) 数量的分析
 - 46) 多変量解析で「探り」をいれてみる
 - 47) 既知の強力な媒介要因の影響を取り除いてみる
 - 48) コンピュータ・シミュレーション
 - 49) 数理モデル

2-3 仮説の構成

「何を研究するのか?」が決まったら、具体的に研究の目的を定めた上で仮説を考える。仮説は、多くの場合、二つ以上の変数の間にどのような関係がある

かについての予想を述べたものである。1章で取り上げた Twenge *et al.* (2001) の研究の目的は、拒絶や排斥と攻撃行動との関係を明確にすることであった。攻撃行動を示すことが原因で他者から拒絶を受けたり排斥される可能性もあるが、逆に、拒絶・排斥されることが原因で攻撃行動が生じることも考えられる。因果関係を明確にするには実験的研究が必要となる。そこで、根拠を示しながら

ら、拒否や排斥は攻撃行動を増加させるだろう、という仮説を立てたのである。ただし、これは概念的な水準の仮説であり、実験に際しては、さらに操作された変数の水準で仮説を述べる必要がある。

あるトピックに関して、「このように考えれば必ず仮説を導くことができる」という確実な方法があるわけではない。しかし、仮説を導く可能性が高くなる方法はある。McGuire (1997) は、こうした方法（ヒューリスティックス）を 49 リストアップし、これらを五つのカテゴリー（I～V）とサブタイプ（A～N）に分類している（表 2-3）。この表 2-3 では、順を追って難しい作業が必要とされる項目が並ぶように構成されているが、卒業論文のための研究の場合でも、自分が置かれた状況の資源を最大限に活かしながら可能な項目を試してみるとよいだろう。

研究に値すると思われる仮説を構成したら、研究の実施にはさまざまな制約があることを念頭に置きながら、以下の点について検討しておく必要がある。

- ① その仮説を検証する適切な方法はあるか。
- ② いままでの研究で得られた知識から考えて、その仮説は「理に適った」ものか。
- ③ その仮説は、検証が可能であるように述べられているか。
- ④ その仮説は、過度に一般的あるいは特殊なものではないか。

仮説を述べるときには、研究の対象となる概念を明確にし、言語化し、その真偽を問う形式になる。また、仮説は以下の例のように、箇条書きにせずに文章の中に組み込むのが普通である。

「主要な仮説は、実験室内での社会的排除を経験した人は、利用されることへの警戒心と援助の潜在的受け手に対する共感の欠如を反映して、向社会的行動を有意に減少させるだろう、というものであった。」(Twenge *et al.*, 2007, p. 57)

「個人的に重要な集団の成員の反態度的行動を目撃すると観察者に代理的不協和が生じ、これが観察者の態度変化を動機づけるであろう、という仮説の検証を試みる。」(Norton, Monin, Cooper, & Hogg, 2003, p. 48)

なお、仮説はあくまでデータを得る前に立てるものであり、得られたデータを分析した後で、あたかも事前に立てられていたかのように仮説を論文に記す

のは、研究者としての誠実さの面で問題があると言える (Kerr, 1998)。仮説に反する結果が得られた場合には、その理由について十分に考察を加えた上で新たな仮説を構成し、それを別の研究によって確認することを考える。

日常生活には無数の変数があり、常に互いに影響を及ぼし合っている。心理学研究はそのうちの特定の変数に注目し、それらの関連性を解きほぐしていくとする行為だから、注目した変数以外はみな剰余変数である。宮谷と坂田(2009)は、多くの心理学研究で考慮すべき剰余変数を表2-3のとおりまとめている。先にあげた学習方法の評価の例では、「参加者の選定」に際する剰余変数として研究開始時点での子どもの学力レベルが存在していて、そこにあったA組とB組の差異が従属変数に影響していた可能性がある。また「道具の変化」については第2節で述べた誤差の問題と関連が深い。実験者効果と参加者効果については第5章で詳しく解説する。

剰余変数の効果が独立変数の効果と混同されることを防ぐためには、剰余変数についても同時に測定してその影響を事後的に取り除く、当初から比較する群間で値に違いがないように調整する、あるいは独立変数と一緒に変化してしまわないようにするなど、なんらかの手立てを検討すべきである。これを統制(control)という。たとえば学習方法の評価の例であれば、事前に学力検査をして「そもそもの頭の良さ」に関するデータを得ておけば、A組とB組に差がないことを確認しておく、クラスごとに学習方法を固定しなくてよい状況であれば学力検査の成績が異なる2群を別途設定してそれぞれにいずれか一方の学習方法を適用する、事後の統計分析時に頭の良さの影響を加味できるような分析モデルを用いる、といった統制を行なうことが可能になる。あらゆる剰余変数を想定、あるいは事後に検出してそれを統制することは困難だが、先のリストを参考にして、できるかぎり統制する努力をすべきである。ただしその結果として「あえて積極的に統制はしない」という結論にいたることもありうる。

研究の準備：先行研究の探し方

あらゆる科学研究は、過去の研究の蓄積の上に新たな知識を積み重ねていくことで発展してきた。心理学も同様である。いかなる研究者も、新たな研究に着手する際は、その領域で過去に蓄積されてきた知見を俯瞰し、特に注目すべき点は丁寧に精査して、すでに明らかにされていることとそうでないことを明らかにし、そのギャップを埋めるためにはどんな研究をどのように実施すべきかを考えることが出発点となる。それこそがあなたが追究すべき問題、すなわちリサーチ・クエスション（以下 RQ）である。

本章では、研究すべき問題を研究できる RQ に練り上げて行く際にどのようなことに留意すればよいのか、特にその際に最も重要な作業として、過去に蓄積されてきた知見を探る際に心がけるべきことと具体的なハウツーについて解説する。

1 節 リサーチ・クエスション

心理学など社会科学は、社会や人間から学ぶ学問であり、社会現象や人間行動を予断や偏見をもたずに観察することこそが問題発見にとって重要である。研究課題はいたるところに転がっていて、日常生活の中で目にしたことや見

ここから統制変数という言葉が生まれる

聞きしたものについてふと抱いた疑問が優れた研究結果につながることも少なくない。しかしこうした状況は、時にかえてリサーチ・クエスチョン (RQ) 発見に困難さを感じることもつながるらしい。学生からよく「どうやって研究テーマを見つければよいのですか」という質問を受けるが、リードに記したようなことしか答えようがないので、不得要領な顔をされることが多い。しかし、RQ はこう設定しなければならない、というルールはないので、まずは興味をもてる対象を発見して、そこから細分化した研究課題を導き出していくことになる。

興味をもてる対象を「そのまま」現実に着手可能な研究課題にできることはあまり多くない。一生かかっても答えが見つからないかもしれないくらい壮大な RQ は、たとえば卒業論文のテーマにはあまりふさわしくないかもしれない(むしろ小さな(と思われる)テーマにも意外な面白みがあることも多い)。また、さまざまな現実問題もある。たとえば、研究に割くことができるコスト(時間や費用)、倫理的問題、そして、研究者自身の経験や知識の限界などがそれである。「制約がある」と言ってしまうとつまらないかもしれないが、余計な枝葉を切り落として RQ をミニマムかつ核心をついたものに練り上げていくのだと考えれば面白くもなろうし、何より必要な作業である。

2 節 巨人の肩の上に立つということ

研究とは、人が行なう文化的活動の一つである。人は、さまざまな情報源——古くは伝承、そして書籍、新聞やテレビなどのマスメディア、現代においてはインターネット——から情報を獲得し、それを知識として蓄積していく。それだけでは飽き足らず、自ら未知の領域に踏み込んで新たな経験と知識を獲得し、それを情報として発信しようとする。そうした行為の一つが研究である。特に科学研究は、たとえそのきっかけが個人のふとした疑問であろうとも、成果として得られた情報は、それまでに蓄積された膨大な知識と矛盾しないかどうかを比較され、新たな知識として付加するに値するものであるかどうか、検証の目にさらされることになる。個々の研究は、科学という、人類が築き上げ

てきた知識体系のピラミッドを構成する 1 ピースの石である。しっかりとした基盤の上に、しっかりとした石を積み上げることが求められる。ニュートンが知人に宛てた書簡に記したフレーズ、

If I have seen further it is by standing on the shoulders of Giants.

(私がより遠くを眺めることができているとすれば、それは巨人の肩の上に立っていることによるものです)

でよく知られるとおり、こうした行為はよく「巨人の肩の上に立つ」という言葉で語られる。では、どうすれば巨人の肩によじ登れるのだろうか。

3 節 先行研究レビューの意義

巨人(あるいはピラミッド)を構成しているのはこれまでの科学研究、すなわち数多の先行研究である。もちろん常に成長して(あるいはどんどん積み上がって)いる。これを登っていく行為のことを「レビュー (review)」という。レビューとは、これから追究しようとする研究テーマに関する先行研究についての文献を探索し、それらを網羅的にまとめ、当該テーマについての研究の動向を知り、行く先を展望することを指す。先行研究レビューは、以下の 4 つの点で重要である。

まず、研究テーマにおいて何が問題となってきたかが明確となり、そこで培われてきた知識体系になじむことができる。そして、どのように知識が培われてきたかを知ることによって、自分が着手しようとしている研究がその知識体系の中でどのような位置づけになるのか、つまり、先行研究とどのような関連性をもつのかを把握すること



ができる。このことは、研究に一定の方向性を与えてくれる。さらに、先行研究で得られた結果は画一的でないことがほとんどであり、それを知ることも重要である。つまり、どのような点についてはすでに同意が得られていて、どのような点ではそれがまだ得られていないのかを知ることによって、まだ残されている課題を発見することができる。このことは、「車輪の再発明」という喩えでよく語られる、広く受け入れられすでに確立された知識を知らずに、同様のものを再び一からつくるような無駄な労力の浪費を防ぐことができ、新しいアイデアの創造に多くの力を注ぐことができるようになる。

4 節 先行研究の収集法：概論

では先行研究はどのように集めればよいだろうか。研究テーマによらず、あるいは学生だろうが職業研究者だろうが、以下が基本的なプロセスである。

1 基本文献を決める

研究テーマに関連する文献を探すためには、まずは糸口をつかむこと、つまり基本となる文献を発見するのが何より肝心である。まずはそのテーマについて記述のあるテキストや事典類が参考になる。いずれも当該テーマについて数多くの参考文献に基づいた凝縮された記述があることが期待できる。どのような資料が参考になるかは、参考文献リストの充実度で判断するのがよいだろう。その点で、印刷版のものだけではなく、Wikipediaに代表されるようなWeb上の資料も参考になりうる。ただしWikipediaはオープンソース、つまり専門性などを問わず誰でも記事の作成や編集ができる事典であるため、未完成の項目や不正確な情報を含む記事が少なくないし、頻繁に書き換えられる場合もあって内容は安定していない。その他のWebサイトでテキストや用語集を謳うものも、多数の利用者による集合知ではなく個人の労作であるかもしれないが、情報の信頼性については鵜呑みにしないほうがよい。もちろん嘘や虚偽ばかりだと言いたいわけではないが、利用するには内容が正確かどうかを別途確認する手続きが必須で、確認のための手がかりはやはり当該記事に明記され

た参考文献リストである。なお、印刷版の資料でも、巷の「入門書」とされるものの中には一切の参考文献が示されていないものもある。こうした書籍は、読みやすいかもしれないが、興味をもてる対象の発見のためならばまだしも、少なくともRQの練り上げには最も向いていない。つまり、ある資料がこうした作業をする際にそれなりに信頼に耐えうるものかどうかを知る最も簡便な手法は、参考文献リストがあるかどうか、そしてその内容が充実しているかどうかを確認することである。

基本文献は、なるべく新しいもののほうがよい。なぜならそれが後述する「芋づる」の端緒となるからである。出発点から「その文献を引用しているより新しい文献（被引用文献）を探す」ことは不可能ではないが、「その文献が引用している文献を探す」よりは困難な作業になる。研究は「巨人の肩によじ登る」行為であることを考えれば、あなたがそうしようとしているのと同様に、先行研究にもそのプロセスがきちんと書かれているはずだから、あなたはそれをたどればよいのである。

2 芋づる式に関連文献を探す

基本文献が見つければ、次は「芋づる式」に関連する論文をたどっていく作業を進めることができる。前述したとおり、基本文献の引用文献と被引用文献の両方が、その候補となる。引用文献は基本文献にリストアップされているから探しやすいが、被引用文献については基本文献に手がかりがないの



図 3-1 Google Scholar トップ画面

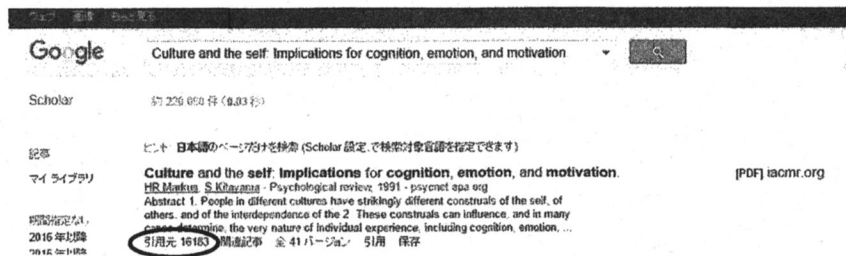


図 3-2 Google Scholar での被引用文献の探し方

で外部資源に頼ることになる。2017 年現在で最も利便性が高いのは Google Scholar (<https://scholar.google.co.jp/>) である (図 3-1)。トップページに「巨人の肩の上に立つ」と書かれているのが象徴的である。図 3-2 は、'Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation' (Markus & Kitayama, 1991) を検索した結果だが、「引用元」に被引用文献が 16,183 件あることが示されている。ここをクリックするとそのリストを参照することができる。

3 図書館や Web で関連文献を探す

もちろん基本文献「だけ」に限って作業を進めなければならないと言っているわけではない。似たテーマの論文に目を通すことも、新たな発見をもたらす可能性がある。

基本文献が書籍なのであれば、図書館に借りに出かけたついでに書棚の周辺に置かれている書籍を手にとってみるとよい。図書館の書籍は日本十進分類法 (NDC) に基づいて分類記号が振られ、その順番に配架されているので、近くにある書籍には基本文献と関連する内容が含まれている可能性が高い。

基本文献が学術雑誌に掲載された論文なのであれば、同じ雑誌に掲載されている他の論文に目を通してみるとよい。詳しくは後述するが、現在はインターネットで参照できる電子ジャーナルが充実している。ただし、学術雑誌は、有償の契約制のものが多いため、自分が利用可能な図書館の契約内容に応じて閲覧できる範囲に制約がかかるのが現状であるが、以前と比べるとオープンアク

セス (誰でも無料で論文が閲覧・ダウンロードできる) のものが増えている。

こうしたサイクルをある程度繰り返すと、だいたいその研究テーマの世界が見えてくる気がするものである。気がする、と書いたとおり、本当にその世界を見渡せるようになるわけではない。というより、どういう状態であれば見渡せたといえるのかは誰にもわからない。いくら網羅的にと心がけても見落としはありえるし、科学の世界は日進月歩なので日々新しい研究成果が生み出されてもいる。ずっと先行研究を探し続けていると自分にはもう何もできないことがないような気がして研究に着手できなくなることもあるので、どこかで区切りをつけて次のステップに進もう。ただし、その後の過程で定説と異なる結果や新たな (と思える) 知見が得られた際は、再度関連する文献を探し直して比較検討の材料とするよう心がけたい。

4 論文に「目を通す」ということ

先ほどから、論文に「目を通す」という表現を何度か使った。「読む」とは書かずにわざわざ「目を通す」としたことにはそれなりの意味がある。つまりここでは「手に入れた論文すべてについて隅から隅までを精読せよ」と言っているわけではない。かといってタイトルだけチラ見すればよいと言っているわけでもない。まずは重要な情報を拾い読みせよ、と言っている。

ではどこを拾い読みすればよいかというと、論文はおおむねどれも同じ構成をしている (詳しくは第 11 章で解説している) ので、特定の箇所に目をつければよい。まず表題に続いて要約を読み、研究の概略を把握する。しかし要約は紙幅の節約のために抽象的な表現が多く、それだけでは具体的に何をしたのかがわかりにくいこともある。そこで次に目をやるのは結果に言及している部分に記載されている図表 (特にグラフ) である。結果の中でも特にアピールしたいものを図表にすることが多いためである。そして仮説を確認する。これは「問題と目的 (序論)」の最後のほうにまとめられていることが多い。仮説を理解してから結果を確認するほうが「正統」かもしれないが、初学者や、そうでなくてもまだ全体の様相がつかみきれていない研究テーマについて知るときは、得られた事実から遡及的に仮説が想定する範囲を把握するほうが、少なくとも「目を通す」段階では効率的だと思われる。

こうして拾い読みした論文のうち、これはじっくり読むべきだと思った論文は、改めて本腰を入れて精読する。精読の方法については小牧（2015）などが参考になる。ただし、一度そのフィルタにかからなかった論文も、必ず保存しておくだけではなく、自分なりの要約やコメントなどをメモとして残しておくことが重要である。いったんは不要だと思っても、いつまたそれに立ち戻ることがあるかもしれない。人の記憶力は案外あてにならないものなので、自分自身の論文を書く際に「もう一度最初からやり直し」にならないよう、自分なりの情報アクセスログをとっておくようにしよう。詳しくは後述するが、論文の電子化が着々と進んでいるので、紙媒体から一本ずつ論文をコピーしていた昔日と比べると、今はPDFファイルをどんどんダウンロードできるので、あっという間に山のように情報は集まる。だからこそ、かえって分類・整理をこまめにするよう心がけてほしい。

5 節 心理学の研究論文に触れる

本節ではもう少し具体的に、先行研究の探し方のハウツーについて、特に初心者には書籍を探すよりも数居が高いと思われる、学術雑誌に掲載されている論文に焦点を当てて解説する。

心理学の研究論文の多くは、学協会が刊行する学術雑誌（多くは『**心理学研究』という名前がついている）か、大学や学部・学科など諸研究機関が刊行する学術雑誌（多くは『**紀要』という名前がついている）に掲載されている。前者は研究者仲間や同分野の専門家による評価・検証（査読）を経ていることがほとんどだが、後者はそれが無い場合がほとんどなので、前者に質の高い論文が掲載されていると考えるほうがよい。ただし、これはあくまで日本で刊行されているものの場合である。国際的な学術雑誌は、刊行母体が学協会ではないものも数多くある。たとえば‘Science’はアメリカ科学振興協会（American Association for the Advancement of Science : AAAS）を母体として刊行されているが、‘Nature’は特に母体となる学協会をもたず、Nature Publishing Group により刊行されている。

こうした学術雑誌は、以前は紙媒体のみで提供されていた。その後、インターネットの普及に伴い、紙媒体を電子化し、両方で入手可能にするサービスが広まった。そして近年は電子ジャーナル、つまり Web 上で PDF ファイルや html 形式で論文が提供されるサービスが普及している。「ポーンデジタル」すなわち紙媒体を刊行しない雑誌も増えてきつつある。電子ジャーナルの代表的なプラットフォームには J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) やメディカルオンライン (<http://www.medicalonline.jp/>) がある。論文の要約はもちろん、本文も無料で入手することができる場合も多い（図 3-3）。日本の心理学系の雑誌で紙媒体を廃止した雑誌は 2017 年 4 月現在まだないが、冊子体より電子ジャーナルで情報発信が早い、つまり電子ジャーナルで冊子体に先立って掲載予定論文を Web 上で公開（早期公開）している雑誌はいくつかあり、今後増加することが見込まれる（表 3-1）。また、紙媒体と電子ジャーナルの過渡期に「紙媒体で刊行された学術雑誌を電子化して提供する」サービスを集約していたのが国立情報学研究所の運用していた電子図書館事業



図 3-3 J-STAGE 上の「心理学研究」電子ジャーナル

表 3-1 電子ジャーナルで「早期公開」を導入している心理学系の雑誌 (2017 年 3 月現在)

心理学研究 (日本心理学会)
基礎心理学研究 (日本基礎心理学会)
社会心理学研究 (日本社会心理学会)
実験社会心理学研究 (日本グループ・ダイナミクス学会)
スポーツ心理学研究 (日本スポーツ心理学会)
生理心理学と精神生理学 (日本生理心理学会)
動物心理学研究 (日本動物心理学会)

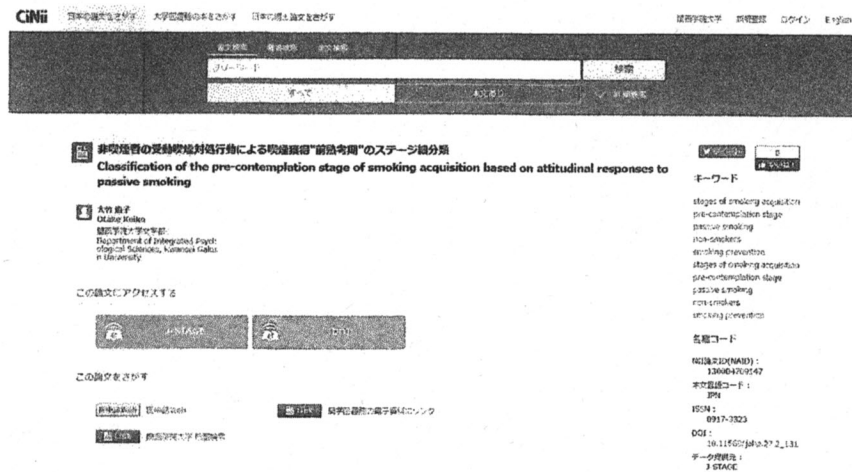


図 3-4 CiNii で参照できる論文書誌情報

(NII-ELS) で、これと連動したデータベースサービス **CiNii Articles** (<http://cinii.ac.jp/>) も、過去に刊行された論文を探す手がかりとしては有用である (図 3-4)。ただし 2017 年 3 月末まで NII-ELS は事業を終了したため、書誌情報の検索・参照が主たるサービスとなり、他サービスで提供されている論文 PDF については提供元へのリンクが示されるのみとなった。

これらのサービスは心理学に限らずあらゆる学術雑誌に関する情報提供を目的としているので、あまりにも網羅的すぎて、すでに論文誌にあたりがついているとか、調べたいキーワードが決まっている、というのであればかえ

て探しにくいと感じるかもしれない。まず心理学分野ではどんな学術雑誌が刊行されているのかが知りたいのだ、という場合は、オンラインで本文入手可能な心理学関係の学術雑誌がまとめられた「心ポ (心理学ポータル)」(<http://www.27.atwiki.jp/simpo/pages/23.html>) のコンテンツ (図 3-5) や「Web 上で入手可能な心理学論文誌」(http://nawatakengo.web.fc2.com/web_journal.htm) などが役に立つ。これらのサイトは、いずれも個人が運営しているが、学術雑誌以外にも心理学の研究・教育に関する情報が充実している。

なお、ここで紹介したのは日本で刊行されている (雑誌名が日本語の) 学術雑誌が中心で、こうした雑誌の掲載論文のほとんどは日本語で書かれている。しかし特に近年では、日本人研究者の活躍の場も国際的に広がっていて、日本人研究者による研究であっても、国際的な論文誌に英語論文として掲載されることも多くなっている。特に心理学が欧米を中心に発展してきた研究分野だという事情もあるが、やはり学問における共通語は英語である。日本語論文の読

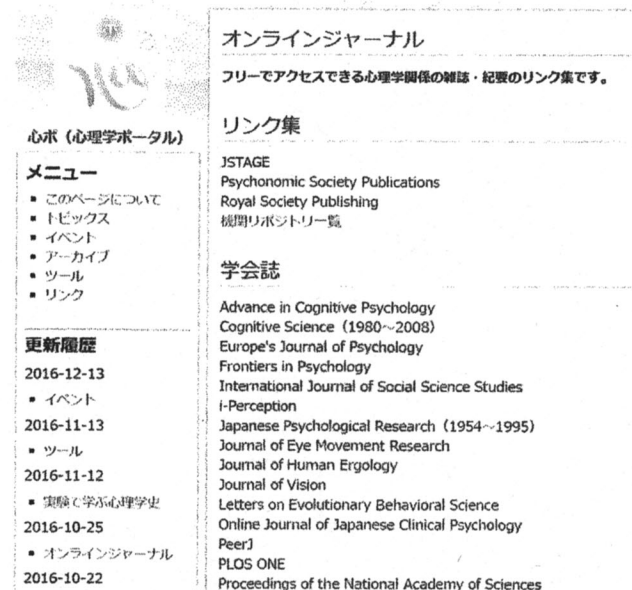


図 3-5 心ポ (心理学ポータル) のオンラインジャーナルへのリンク集

者はほぼ日本人に限られてしまうから、「これぞ」という自信のある研究は、日本語話者であっても英語で論文を書いて国際的に評価の高い雑誌に掲載されることを目指す。そうすることで、より多くの読者を獲得することができるからである。この傾向は、臨床や教育、社会といった日本に特有の社会問題と関連の深い応用分野よりも、知覚や生理、認知といった基礎分野において顕著である。英語で書かれているからとひるむことなく、研究テーマについて深く知るためには必須だと考え、語学としての勉強も兼ねてぜひ挑戦していただきたい。国際誌の論文を探すには前述の Google Scholar が便利である (図 3-6: 'mental rotation (心的回転)' の検索結果)。キーワードのほかに、刊行された期間で絞り込むこともできる。また、研究機関によってはアメリカ心理学会の刊行する学術誌の論文データベース PsycARTICLES や、さらに範囲を広げた行動科学・社会科学研究の総合的データベース PsycINFO など、オンラインで提供される有料サービスと契約しており、利用可能な場合もある。これらのサービスは心理学論文に特化している点で、Google Scholar よりも探索対象を絞り込みやすいので、もし導入されていれば積極的に活用したい。

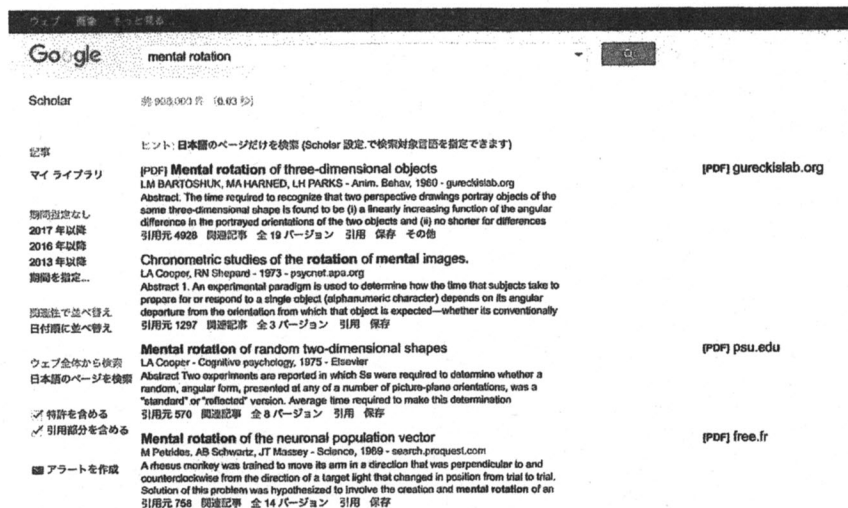


図 3-6 Google Scholar を利用した論文検索

6 節 心理学の研究テーマを知る

自らの RQ を発見し、絞り込もうとすると、世の心理学者たちがどのような RQ に取り組んでいるのかを知ることも参考になるかもしれない。論文はすでに行なわれた研究成果をまとめたものであるから、ある意味で「過去のもの」である。今まさに進行中の研究にはどのようなものがあるかを知りたい場合には KAKEN (科学研究費助成事業データベース) (<https://kaken.nii.ac.jp/>) が有用である。科学研究費助成事業とは、文部科学省と日本学術振興会が提供する研究資金によって行なわれている研究のことで、学術的に注目を集めていたり社会的必要性の高い研究テーマが採択されることが多いので、ざっと眺めてみるだけでも心理学の研究トレンドを知ることができる。図 3-7 は、KAKEN データベースで 2016 年度に開始された「心理学」分野の研究課題を検索した結果を、研究資金の配分額が多い順に並べ替えたものである。配分額の大きな研究プロジェクトは、Web サイトなどを通じて積極的な情報発信をしていることが多いので、さらに詳細な情報を知ることもしやすいだろう。

7 節 さあ、歩きはじめよう

本章では、やや漠然とした研究テーマからスタートして、心理学研究として追究すべきリサーチ・クエスチョン (RQ) を練り上げていく際にどのようなことに留意すればよいのか、特にその際に最も重要な作業として、過去に刊行された先行研究を探す際に心がけるべきことと具体的なハウツーについて解説した。巨人の肩という未踏峰によじ登るための心構えと適切な準備が必要であること、しかしとりあえず歩きはじめてみることも重要なこと、何よりその 2 つを伝えたい。

そしてもう一つ重要なことは、先行研究はあなたの研究にとってのルールブックや教科書ではないということである。本章当初で述べたとおり、何のために先行研究を探索するかといえば、「すでに明らかにされていることとそう

検索結果: 449件 / 研究分野: 心理学 AND 開始年度: 2016 TO * AND 研究課題ステータス: 採択

すべて選択 ▼ XMLで出力 ▼ 実行 表示件数: 20 ▼

1. 集合行動の認知・神経・生態学的基盤の解明

研究種目 基礎研究(S)
研究分野 社会心理学
研究機関 東京大学
研究代表者 亀田 達也 東京大学 人文社会系研究科 教授
研究期間(年度) 2016-05-31 ~ 2021-03-31 採択

2. ライフスタイルと脳の働き - 超高齢社会を生き抜くための心理学 -

研究種目 基礎研究(S)
研究分野 実験心理学
研究機関 熊本大学
研究代表者 嶋山 直 熊本大学 文学部 教授
研究期間(年度) 2016-05-31 ~ 2021-03-31 採択

3. 高齢者の学習: 認知的制御、感情、動機づけを考慮した学習機制の解明と支援の検討

研究種目 基礎研究(A)
研究分野 教育心理学
研究機関 筑波大学
研究代表者 原田 悦子 筑波大学 人間総合科学研究科(系) 教授
研究期間(年度) 2016-04-01 ~ 2020-03-31 採択

図 3-7 KAKEN データベース

でないことを明らかにし、そのギャップを埋めるためにはどんな研究をどのように実施すべきかを考える」ためなのである。先行研究の内容そのまますを受動

的に受け入れるのは、論文の本来的な読み方ではない。巨人の手でその肩に乗せてもらうのではなく、自分の力でよじ登るのだから、論文は、研究者が、自らの知識や経験を土台にそれと対峙し、批判的にかかわっていくべき対象である。当然、その内容に同意できないこともあるだろうし、その主張に納得して、自らの知識体系を修正せざるをえなくなることもあるだろう。また、先行研究間で同じ対象に関する見解が相違することもあるだろう。いずれにせよ、先行研究と積極的にかかわることが重要で、そこから深く思索をめぐらせ、新たなRQを提起することができてこそ、高みからより遠くを眺めることができていることになる。

また、特に研究初心者にとって、先行研究を丁寧に探索し、優れた論文を数多く読み込むことは、論文を書く力もつけてくれる。なぜなら、優れた論文は、研究内容はもちろん論文作法についても優れている場合が多く、パンデューラの社会的学習理論(第1章参照)から考えれば、それは論文を書くためのスキル向上にもつながるからである。心理学の学習カリキュラムには「実験実習」がほぼ必ずあり、与えられたテーマについて与えられた方法で分析し、決められた体裁でレポートを書く訓練を積むことはできる。それと研究が本質的に異なるのは、RQを自ら探索・設定するかどうかである。論文では、なぜあるテーマで研究をするのか、それがどういう点で研究するにふさわしいのか、得られた結果は綿々と続く研究の流れにどう位置づけられるのかを論ずることが必要で、そのスキルは実習で与えられた課題をこなしている程度では残念ながら身につかない。RQ設定の際にどれだけ奮闘するかが、論文のクオリティを単なる「実習レポートに毛が生えたようなもの」ではないものへと高めてくれるだろう。

少し長くなるが、本章は心理学研究の目指すべきところを端的に示した、鯨島(2016)の引用でしめくりたい。

「そもそも、科学というのは、なにか唯一無二の「真実」を「発見」することではなく、人が自然を理解するために世界の見方やモデルを仮説として構築・提案し、その証拠を様々なアプローチで検証・更新するというプロセスのことではなかったか。近年では、一つの論文が発表される毎に

卒業論文のためのものであろうと、プロの研究者によるものであろうと、それが科学的取り組みである以上、研究の根本は同じである。

第2部

心を「測定する」
ということ

52 第1部 心理学を「研究する」ということ